

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	心理学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	岡野 邦夫						

授業の概要	心理学は人間行動学であり、科学的に人間の精神的・身体的行動を理解しようとする学問である。この授業では発達心理学的視点を取り、受精から胎内期、乳幼児期を経て老年期までの人間の行動発達を考える。また、広範に人間行動を理解するため、ときには社会心理学、学習心理学、臨床心理学などの知見も紹介する。				
学習到達目標	心理学的視点から人間行動を理解できるようになり、また心理学的知見を理解する。そのことにより将来理学療法士として患者、および周囲のひとびとと接するときに、それらの人々の行動を少しでも深く理解できるようにする。				
授業内容	回	内 容	回	内 容	
	1-2	・ 遺伝的伝達、受精、 卵体期胎芽期・胎児期 ・ 出産、新生児期、原始行動と原始反射			
	3-4	・ 記憶とは、最初の記憶、 記憶のメカニズムと種類 ・ 視覚、聴覚、その他の感覚の発達			
	5-6	・ 乳児の全身運動の発達、環境とレディ ネス、基本的生活習慣、言葉の発達 ・ 愛着の形成、学習・刻印づけ			
	7-8	・ 人間関係、児童期の運動発達 ・ 幼児期の運動発達、第一次反抗期 ・ 知的発達、仲間関係			
	9-10	・ 第二次反抗期、成人前期・中年期・老年 期前期・後期			
授業方法	講義				
成績評価の方法	筆記試験(100%)				
履修上の留意点	授業は必ず毎回出席し理解するように心がけること。黒板は説明のために使用する。				
教科書等	必要な資料はその都度配布する。配布資料は毎回持ってくること。				
参考図書等	参考図書は必要に応じてその都度指摘する。				
関連科目	医療統計学 その他の関連科目				
コアカリキュラム対応					
最近の国試出題傾向	最近の国試の出題傾向と出題された問題については授業中に指摘する。				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	哲学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	橋詰 史晶 ○哲学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	本講座では、まず哲学というものが一般にどのような営みであるかについて概説したのち、主に現象学という学派の哲学を紹介していく。現象学は20世紀以降の哲学における重要な学派であり、私たち自身の体験から出発するところに特徴がある。現象学の思考法を学ぶことで、身近な世界を新たな視点から眺める柔軟な思考力を身に付ける。				
学習到達目標	(1) 一般に哲学がどのような学問であるかを理解する。 (2) 現象学の思考法を学ぶことで、身近な世界を新たな視点から眺める柔軟な思考力を身に付ける。				
授業内容	回	内 容	回	内 容	
	1-2	哲学とは何か			
	3-4	科学的世界観以前の世界			
	5-6	他者について			
	7-8	現象学的な身体			
	9-10	ケアの現象学			
授業方法	講義				
成績評価の方法	定期試験(100%)				
履修上の留意点	授業時間外の課題は課さないが、そのぶん授業中は板書に集中すること。				
教科書等	なし				
参考図書等	授業で扱ったテーマについて更に学びたい学生のために、毎回参考文献を紹介する。				
関連科目	特になし				
コアカリキュラム対応	なし				
最近の国試出題傾向	特になし				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	政治学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	岸田 健司 ○政治学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	政治学の基礎的理論を学びつつ、同時に、現代政治を理解するために必要な政治制度や政治問題について学習する。適宜時事問題の解説を行う。また、論述に慣れていない学生も多いため、参考のため模範解答例を配布し、定期テストの対策も行う。			
学習到達目標	政治学の基礎知識と、現代政治を理解するための基本的知識を習得する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	①政治権力とは何か ②政治的 リーダーシップ ③政治イデオロギーと政治的無関心		
	3-4	①デモクラシーをめぐる諸問題 ②議会政治 ③主要国の政治制度		
	5-6	①政党と政党制 ②選挙の機能 ③選挙制度		
	7-8	①圧力団体の機能 ②行政国家と官僚制 ③日本政治の特色		
	9-10	①大衆民主主義の諸問題 ②国家と政治体制 ③国際政治		
授業方法	講義形式で授業を進めるが、質問を歓迎し（適切な質問をした学生にはプラス点を与える）、できるだけ双方向の授業をしていきたい。			
成績評価の方法	定期テストで評価する。(100%) 定期テストは、あらかじめ4問を提示し、その中から2問出題する。			
履修上の留意点	私語・居眠りは厳禁。注意しても修正されない場合はマイナス点を付ける。			
教科書等	加藤秀治郎 『はじめて学ぶ政治学』 実務教育出版			
参考図書等	特になし			
関連科目	特になし			
コアカリキュラム対応	特になし			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	歴史学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	江川 ひかり、矢本 彩 ○歴史学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	歴史学的問題視角・思考方法を身につけたうえで、生命の誕生、生命の進化の歴史、人類の歴史という歴史学の基礎知識を養う。次に、主として西アジアにおける古代から現代に至る歴史を、イスラーム文明とオスマン帝国における政治および社会とを中心に考察する。			
学習到達目標	歴史学が、高校教育までの単なる「暗記科目」ではなく、歴史的事象に関して個々人が思考して解釈していく学問であること、歴史学とはそもそも生命の進化のリレーであり、学生個々人がそのバトンを受け取った存在であることを理解する。次に、西アジアにおける一神教の発展、イスラームの基本的考え方、イスラーム文明の発展、そしてオスマン帝国の盛衰を理解することによって、イスラームへの偏見をなくし、歴史学的重要性を確認する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	46億年の生命の歴史 生命が誕生してからホモ・サピエンスに至る進化の歴史を跡づける。		
	3-4	日本における産の現場 命のバトンを受け取ったわたくしたちが生まれる産の現状を考察する。		
	5-6	一神教の発展とイスラーム文明 ユダヤ教、キリスト教、イスラームと発展する一神教の系譜を理解する。		
	7-8	キリスト教文明とイスラーム文明 同じ一神教の姉妹宗教であるキリスト教とイスラーム文明の融和の歴史を考察。		
	9-10	オスマン帝国の政治と社会 最後のイスラーム王朝といわれるオスマン帝国の政治と社会を理解する。		
授業方法	講義および視聴覚映像を利用			
成績評価の方法	毎回の感想レポート（３０％）、試験（７０％）			
履修上の留意点	歴史は暗記科目ではなく考える科目であるので、授業中もしっかり講義を聞き、考えることが不可欠。			
教科書等	毎回レジュメを配布する。			
参考図書等	小杉泰・江川ひかり編『ワードマップ イスラーム』新曜社、２００６．			
関連科目	特になし			
コアカリキュラム対応	なし			
最近の国試出題傾向	特になし			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	物理学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	鈴木 一男						

授業の概要	ヒトの動作を分析するのに有用なツールとして力学がある。本科目は力学を中心に学び、力やモーメントについて理解を深める。			
学習到達目標	①運動の法則を説明できる。 ②角運動量とモーメントについて説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	物理学的考え方とは 物理量の次元と単位		
	3-4	位置、速度、加速度 運動の法則		
	5-6	仕事とエネルギー		
	7-8	角運動量とモーメント		
	9-10	まとめ		
授業方法	概念の説明、例題の解説、問題演習			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	不明な点は質問して解決すること			
教科書等	プリントの配布			
参考図書等				
関連科目	運動学Ⅰ(1年)、運動療法学Ⅰ（2年）			
コアカリキュラム対応				
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	生物学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	藤田 隆夫 ○生物学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	生物の特徴を 5 項目に取りまとめて、各特徴を学習する。			
学習到達目標	医療関係を志す者として必ず知っておくべき基礎内容を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	①生物の特徴 生物の多様性と共通性 細胞の種類と構造 組織と器官		
	3-4	②遺伝とDNA 遺伝の法則 遺伝子の本体 タンパク質の合成		
	5-6	③同化と異化 代謝とエネルギー ATP、酵素、呼吸		
	7-8	④体内環境の維持 体内環境と体液 腎臓と肝臓 神経とホルモンによる調節、免疫		
	9-10	⑤生殖と発生 配偶子の形成 受精と発生 器官形成		
授業方法	毎回、基礎的なプリントを配布し、内容を説明する。プリントは教科書の代用として使用する。			
成績評価の方法	筆記試験により評価する。（100％）			
履修上の留意点	教科書丸暗記のような学び方ではなく、生きた知識としてこれからの職業に役立つ生物学を身につけて欲しい。			
教科書等	教科書は指定しない。高校時の教科書、配布プリントをきちんと学習して欲しい。参考書として生理学（第5版）活用。			
参考図書等	スクエア最新図説生物（第一学習社）（五訂版）・サイエンスビュー生物総合資料（実教出版）・生物図録（数研出版）他、1000円程度で高校生物を全て網羅していてオールカラー、おすすめです。			
関連科目	生理学Ⅰ・Ⅱ（1年）			
コアカリキュラム対応				
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	情報処理演習			単位数	1	時間数	40
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	実習
担当講師	植竹駿一						

授業の概要	情報化社会を迎える中で情報選択や処理能力が必要とされる。本講義では、Microsoft officeのWord、Excel、PowerPointなど基本的なソフトウェアの使用法を課題の作製を通じて必要な知識と技能を身につけることを目的とする。				
学習到達目標	・情報の取り扱いについての知識を整理する。 ・officeソフトを使用した課題を作成し情報処理の方法を理解する。 ・課題に至る過程を形成的に作り上げる。				
授業内容	回	内 容	回	内 容	
	1-2	情報とは 情報の取り扱いについて 課題1の提示	11-12	基本課題3 統計処理の方略	
	3-4	基本課題1 提出日 Wordの使用方法	13-14	基本課題3 課題3の提出とフィードバック 課題4の提示	
	5-6	基本課題2 課題2の提示 ショートカットキーに関して	15-16	応用課題4 PowerPointに関して	
	7-8	基本課題2 Excel関数に関して	17-18	応用課題4 課題作成準備	
	9-10	基本課題2 & 3 課題のフィードバックと課題3の提示	19-20	応用課題③ PowerPointを使用しようとしたプレゼンテーション	
授業方法	初回授業と各課題の前には講義を行う。 課題提出に向けた自己学習				
成績評価の方法	課題(100%) 課題の内容にて評価を行う。				
履修上の留意点	パソコンの基本的な使い方を予習しておくことが望ましい。				
教科書等	適宜資料を配布する。				
参考図書等	情報の基礎・基本と情報活用の実践力 第3版				
関連科目	情報リテラシー				
コアカリキュラム対応					
最近の国試出題傾向					

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	体育実技Ⅰ			単位数	1	時間数	40
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	実習
担当講師	本多 尚基 河野 隆志 ○体育教育の実務経験に基づく講義						

授業の概要	・体力測定に関する知識を修得するとともに、自身の体力レベルを確認する。 ・今後、理学療法士はスポーツ現場においても活躍が期待されている。そのため、各スポーツ種目の体験によりルール ・特性を把握し、スポーツ現場で理学療法を提供するための基礎的知識・能力を習得する。 ・実際の競技経験を通じて、技能スキルの獲得（運動学習）の過程を学ぶ。					
学習到達目標	・各スポーツ種目のルール、特性、基礎的技術を理解する。 ・各スポーツ種目で外傷が起こりやすい運動を把握し、スポーツ外傷に関する知識を理解する。 ・技能スキル獲得（運動学習）の過程を理解する。					
授業内容	回	内 容		回	内 容	
	1-2	体力測定 体力測定を実践し、現在の体力レベルを認識する		11-12	バドミントン サーブやスマッシュなどの基礎的技術を習得する	
	3-4	バレーボール オーバーパスやレシーブ、サーブなどの基礎的技術を習得する		13-14	バドミントン シングルス、ダブルスのゲームを通じて基礎的技術を実践する	
	5-6	バレーボール ゲームを通じて基礎的技術の実践とチームプレーについて理解する		15-16	バスケットボール ドリブルやパス、シュートなどの基礎的技術を習得する	
	7-8	フットサル ドリブルやパスなどの基礎的技術を習得する		17-18	バスケットボール ゲームを通じて基礎的技術の実践とチーム戦術や戦略を考え、実践する	
	9-10	フットサル ゲームを通じて基礎的技術の実践とチーム戦術や戦略を考え、実践する		19-20	総括 体育を通じて運動やスポーツ活動の役割や意義を理解する	
授業方法	実技を中心に展開し、ゲームの運営については学生主導で行う。					
成績評価の方法	体力測定、実技実施状況、授業内発表とレポート課題（100％）					
履修上の留意点	授業に出席する際は運動に適した格好で臨み、室内履きを着用すること。安全面上、室内履きを忘れた場合は参加不可とする。なお、ピアスや貴金属など実技を行う上で危険性の高いものの着用は認めない。					
教科書等	特になし					
参考図書等	特になし					
関連科目	健康科学（1年） 体育実技Ⅱ（2年） 体育実技Ⅲ（3年） スポーツ社会学(2年)					
最近の国試出題傾向	特になし					

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	英会話Ⅰ			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	浅田 幸善 ○英語教育の実務経験を活かした講義						

授業の概要	解説と実践練習を通して、英会話の基本ルール（文法・音声・表現）を身につけられるようにする。基本的には一般的な会話を想定しているが、後期には理学療法士(PT)の活動を念頭に置いた会話を採り入れる。会話には「聴く」ことも重要なのでリスニングの練習も行う。また、英語力向上に欠かせないリーディング力を養成するため、やさしめの英文も合わせて読む。			
学習到達目標	会話に必要な基礎力の養成を目的とする。英語を話し、聴くための基本ルールやパターン・表現をしっかりと身につけられるようにする。また、一般基本語彙（2000語レベル）のほか身体部位など関連分野の基本語の習得も図る。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	英語力確認テスト 授業の進め方・学習法ガイダンス 英語の基本ルール (1)		
	3-4	英語の基本ルール (2) 英語を読む (Sammy's PT Adventure) 会話表現・リスニング練習		
	5-6	英語の基本ルール (3) 英語を読む (Sammy's PT Adventure) 会話表現・リスニング練習		
	7-8	英語の基本ルール (4) 英語を読む (Sammy's PT Adventure) 会話表現・リスニング練習		
	9-10	英語の基本ルール (5) 英語を読む (身体のおくみ) 会話表現・リスニング練習		
授業方法	講義			
成績評価の方法	出席点 (10%)、語彙・リスニング小テスト (20%)、期末試験 (70%)の割合で評価する。評価は、100点満点に換算して、優(80点以上)、良 (70～79点)、可 (60～69点)、不可 (60点未満) とする。			
履修上の留意点	授業を受けているだけでは、英語力の向上は望めないので、授業外での学習にも期待します。			
教科書等	特になし			
参考図書等	必要な教材・資料は授業中に配布する			
関連科目	医学英語 (2年)			
最近の国試出題傾向	特になし			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	英会話Ⅱ			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	浅田 幸善 ○英語教育の実務経験を活かした講義						

授業の概要	解説と実践練習を通して、英会話の基本ルール（文法・音声・表現）を身につけられるようにする。基本的には一般的な会話を想定しているが、後期には理学療法士(PT)の活動を念頭に置いた会話を採り入れる。会話には「聴く」ことも重要なのでリスニングの練習も行う。また、英語力向上に欠かせないリーディング力を養成するため、やさしめの英文も合わせて読む。			
学習到達目標	会話に必要な基礎力の養成を目的とする。英語を話し、聴くための基本ルールやパターン・表現をしっかりと身につけられるようにする。また、一般基本語彙（2000語レベル）のほか身体部位など関連分野の基本語の習得も図る。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	英語の基本ルール (6) 英語を読む（身体のしくみ） PTの会話 (1)とリスニング練習		
	3-4	英語の基本ルール (7) 英語を読む（病院） PTの会話(2)とリスニング練習		
	5-6	英語の基本ルール (8) 英語を読む（リハビリテーション） PTの会話 (3)とリスニング練習		
	7-8	英語の基本ルール (9) 英語を読む（運動） PTの会話 (4)とリスニング練習		
	9-10	英語の基本ルール (10) PTの会話 (5) まとめ		
授業方法	講義			
成績評価の方法	出席点 (10%)、語彙・リスニング小テスト (20%)、期末試験 (70%)の割合で評価する。評価は、100点満点に換算して、優(80点以上)、良 (70～79点)、可 (60～69点)、不可 (60点未満) とする。			
履修上の留意点	授業を受けているだけでは、英語力の向上は望めないので、授業外での学習にも期待します。			
教科書等	特になし			
参考図書等	必要な教材・資料は授業中に配布する			
関連科目	医学英語（2年）			
最近の国試出題傾向	特になし			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	健康科学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	河野 隆志						

授業の概要	理学療法士は健康に関連した諸課題に向き合うことが求められる。そのために、健康増進や疾病予防などの幅広い知識を身につけることが重要である。			
学習到達目標	健康の概念・定義が説明できる。 健康に携わる専門職の役割を説明できる。 ライフスタイルの変化に伴う健康について理解できる。 ストレスと健康の関係を説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	健康の定義・概念 健康に影響をもたらす要因 健康寿命について		
	3-4	社会環境と健康 生活や健康に関わる住環境 生活や健康に関わる専門職の役割		
	5-6	ライフスタイルと健康の関連 人生の各期において抱える健康面の課題 加齢に伴うライフスタイルの変化		
	7-8	生活習慣と予防 食習慣が健康に与える影響 運動習慣が健康に与える影響		
	9-10	ストレスと健康		
授業方法	講義			
成績評価の方法	筆記試験又はレポート課題（100％）			
履修上の留意点				
教科書等	講義資料を適宜配布			
参考図書等				
関連科目	病理学、リハビリテーション概論、理学療法概論			
コアカリキュラム対応	B-1-1,B-2-1,B-2-2,B-4-1,B-4-2,B-4-3			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	情報リテラシー			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	高柳 清美						

授業の概要	対象者を取り巻く種々の問題点を解決するために我々は必要とされる情報を「探し出し」「精査し」「使える」能力が必要とされる。①情報リテラシーとはなにかを、②保健医療学領域における情報と情報リテラシー、③情報を入手する方法と情報検索エンジンについて、④根拠に基づいた理学療法・情報情報の管理方法・漏洩防止のテクニック、⑤保健医療領域における情報の応用法、について学ぶ。			
学習到達目標	情報の重要性を認識できる。 情報収集の探索を効果的に実践できる。 情報の批判的吟味ができる。 情報管理の重要性について説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	現代社会における情報の重要性と保健医療領域における情報リテラシー		
	3-4	情報の探索と情報探索のテクニック		
	5-6	収集した情報の吟味、情報の解釈、応用		
	7-8	EBPTと情報および情報の管理と漏洩		
	9-10	情報の応用的利用について		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	情報の取り扱い方に関して事前に予習をすることが望ましい。			
教科書等	講義資料を配布			
参考図書等				
関連科目	情報処理演習			
コアカリキュラム対応	A-2-1,A-3-1,A-6-3,B-5-3			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	解剖学Ⅰ（筋・骨格系）			単位数	2	時間数	48
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	江川 薫、吉田 俊爾 ○解剖に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	理学療法士として知らなければならない基礎となる人体の正常構造を学習する。本講義では、人体の動きに直接関与する運動器系としての「骨格」「関節と靱帯」「骨格筋」について講義し、骨格模型等を用いて視覚的観察を併用することにより、将来の治療を行う際の解剖学的知識を身につける。					
学習到達目標	「骨格」：人体を構成する骨の構造を説明できる。 「関節と靱帯」：骨の連結（広義の関節）の正常な構造と機能を説明できる。 「筋系」：骨格筋の構造（起始・停止、走行、神経支配）を理解し、その作用を説明できる。					
授業内容	回	内 容		回	内 容	
	1-2	・ 骨の肉眼的構造、顕微鏡的構造、発生 ・ 椎骨の形態		13-14	・ 上肢の連結 ・ 下肢の連結 ・ まとめ	
	3-4	・ 胸郭（胸椎、肋骨、胸骨）の形態 ・ 上肢の骨の形態		15-16	・ 筋線維の種類、骨格筋の構造 ・ 上肢の筋の形態	
	5-6	・ 上肢の骨の形態 ・ 下肢の骨の形態		17-18	・ 上肢の筋の形態 ・ 下肢の筋の形態	
	7-8	・ 下肢の骨の形態 ・ 頭蓋の形態		19-20	・ 下肢の筋の形態 ・ 頭部/頸部の筋の形態	
	9-10	・ 関節靱帯総論 ・ 脊柱、胸郭の連結		21-22	・ 頭部/頸部の筋の形態 ・ 胸部/腹部の筋の構造	
	11-12	・ 脊柱/胸郭の連鎖 ・ 上肢の連鎖		23-24	・ 胸部/腹部の筋の構造 ・ 背部の筋の構造	
授業方法	教科書を中心に板書で講義し、人体構造を視覚的に理解するために骨格模型、図のプリントの配布をもとに講義する。					
成績評価の方法	前期と後期の学期末試験（100％）の総合成績により評価する。					
履修上の留意点	人体構造を立体的に理解し、骨および筋との相互関係を考察しながら学習する。 解剖学用語が多数あるので、毎回復習して次の講義に備える。					
教科書等	「標準理学療法学、作業療法学3版 解剖学」 医学書院 「ヴォルフ カラー人体解剖学図譜」 西村書店					
参考図書等	「分担解剖学（第1巻）」 金原出版					
関連科目	運動学、生理学、機能解剖学Ⅰ・Ⅱ					
コアカリキュラム対応	C-1-3					
最近の国試出題傾向						

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	解剖学Ⅱ(循環器,内臓器)			単位数	2	時間数	48
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	吉田 俊爾 ○解剖に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	理学療法士に必要な解剖学的知識は医学の基盤科目であり、人体の構造の習得に不可欠な骨学、筋学、脈管学、内臓学、神経学、感覚器、内分泌学と多岐にわたり分野を学ぶことで、理学療法の臨床的分野に応用できる解剖学的知識を習得することにある。特に前期は消化器、呼吸器、泌尿器、生殖器、内分泌についての基礎的知識の習得に努める。					
学習到達目標	1.内臓学に関する解剖学的基礎知識を習得する。 2.消化器・呼吸器・泌尿器・生殖器・内分泌の各分野を総合的に応用できる知識を習得する。 3.内臓学に関する解剖学的基礎知識を理学療法に応用できる基礎知識を習得する。					
授業内容	回	内 容		回	内 容	
	1-2	循環器系総論 肺循環と体循環		13-14	内臓学総論（実質臓器と中空器官） 消化器系（口腔から肛門までの経路）	
	3-4	心臓（外観と内部構造） 心臓（弁装置・心臓壁）		15-16	消化器系 1	
	5-6	心臓（刺激伝導系・心臓の血管ほか） 動脈系（動脈血の流れ） 1		17-18	消化器系 2	
	7-8	動脈系（動脈血の流れ） 2		19-20	呼吸器系	
	9-10	静脈系（静脈血の流れ） 門脈と奇静脈系（静脈血の特殊経路）		21-22	泌尿器系（腎臓と尿路） （泌尿器の流れ、腎臓の構造と働き）	
	11-12	胎児循環（流路と成人との比較） リンパ系（リンパ性器官・リンパ管の分布）		23-24	生殖器系（男性生殖器・女性生殖器） 内分泌系	
授業方法	講義と実習を併せて実施する。					
成績評価の方法	筆記試験（100％）					
履修上の留意点	基本的な内容を講義するので、確実に習得すること。					
教科書等	「標準理学療法学、作業療法学3版 解剖学」 医学書院 「ヴォルフ カラー人体解剖学図譜」 西村書店					
参考図書等	「分担解剖学（第2・3巻）」 金原出版					
関連科目	生理学、運動学、病理学などその他、多くの科目と関連する。					
コアカリキュラム対応	C-1-3					
最近の国試出題傾向						

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	解剖学Ⅲ（神経系）			単位数	2	時間数	48
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	吉田 俊爾 ○解剖に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	理学療法士は、高齢者や事故などによる身体機能障害、脳卒中などによる麻痺など、身体的障害を持つ方々に対して、医師の指示の下、基本的動作能力の回復を図るために治療を行う者である。そのためには人体の構造と機能については十分な知識が必要となる。解剖学Ⅲは特に神経系および感覚器系の構造と機能について学び、リハビリテーションを行う上で必要な知識を習得することを目的とする。			
学習到達目標	神経系および感覚器系の構造と機能を学び、感覚器系の伝導路および運動器系の伝導路を理解することを目指す。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	神経系を構成する細胞 シナプスの意味 神経系の区分	13-14	脳神経 1
	3-4	髄膜について 脳室系 脳脊髄液の産生と流路	15-16	脳神経 2 脊髄神経 1
	5-6	大脳半球の構造と機能の局在	17-18	脊髄神経 2
	7-8	間脳（視床、視床下部）、大脳核 脳幹 1（中脳）	19-20	自律神経系 嗅覚、味覚、外皮
	9-10	脳幹 2（橋・延髄） 小脳	21-22	視覚器
	11-12	運動系の神経路 感覚系の神経路	23-24	平衡聴覚器
授業方法	黒板への板書、および脳の模型による説明			
成績評価の方法	主に定期試験（100％）にて、判定する。			
履修上の留意点	理学療法士にとって神経系は非常に重要である。従って、積極的に授業に望んでほしい。			
教科書等	「標準理学療法学、作業療法学3版 解剖学」 医学書院 ヴォルフ カラー人体解剖学図譜」西村書店			
参考図書等	必要に応じてこちらからプリントを用意する。 「分担解剖学（第2巻）」金原出版			
関連科目	解剖学Ⅰ、解剖学Ⅱ、生理学Ⅰ、生理学Ⅱ、機能解剖学Ⅰ 機能解剖学Ⅱ、運動学、神経内科学Ⅰ、神経内科学Ⅱ			
コアカリキュラム対応	C-1-3			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	機能解剖学Ⅰ			単位数	1	時間数	24
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	小関 博久 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	1. 骨・筋・腱・靱帯・関節を主体とする運動器の解剖学的構造の知識だけでなく、運動が行われる際にはどのような変化がおこるかを理解する。 2. 関節の一般的な構造を理解した上で、下肢を中心とした関節およびその構成体の特徴を学び、関節を動かす筋の機能についてより細部にわたって理解することを目的としている。 3. 理学療法士が運動器リハビリテーションを円滑・安全・効果的に行うために必要な機能解剖学の知識を身につける。			
学習到達目標	1. 関節の一般的な構造と機能を理解する。 2. 膝関節および股関節の構造・機能・役割・動きを理解する。 3. 荷重位と非荷重位での膝関節および股関節周囲筋の機能や動きを理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【総論】 関節の分類と種類	11-12	【歩行】 歩行周期、歩行中の下肢筋活動
	3-4	【総論】 関節の構成と動き		
	5-6	【股関節各論】 股関節の構成体、股関節のROM		
	7-8	【膝関節各論】 膝関節の筋と機能		
	9-10	【膝関節各論】 半月板の移動		
授業方法	板書を中心に講義を行う。膝関節および股関節を中心とした人体構造や3次元的な動きを視覚的に捉えて理解することを目的としている。			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	機能解剖学はその後に履修する運動療法や整形外科、スポーツ外傷・傷害学、疾患別理学療法の基礎をなすため、広範囲かつ詳細な理解が重要である。			
教科書等	特に指定しない			
参考図書等	小関博久（編）『外来整形外科のための退行変性疾患の理学療法』 医歯薬出版			
関連科目	運動学・整形外科Ⅰ・Ⅱ、スポーツ外傷・傷害学（2年）、臨床スポーツ医学（2年） 整形外科Ⅱ（2年）			
コアカリキュラム対応	C-2-1			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	機能解剖学Ⅱ			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	小関 博久 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	1. 足関節・足と手関節・手の解剖学的構造を機能を視覚的に理解し、その関節を動かす筋の機能についてより細部にわたって理解することを目的としている。 2. 足関節と足部の構造は細かく複雑であり、機能面でも荷重時と非荷重時において関節の運動方向が大きく異なることを理解する。特に荷重時の運動では足関節・足の上に載る下肢・体幹の運動に大きな影響を与えることを理解させる。 3. 巧緻運動として高次元の運動が行われる手関節と手の構造を理解し、その複雑な運動を可能にしている筋の役割についても深く理解することを目的としている。			
学習到達目標	1. 足関節・足部の構造・機能・役割・動き・筋の機能を理解する。 2. 荷重位と非荷重位での足関節・足部の機能や歩行時の動きを理解する。 3. 手関節・手の構造・機能・役割・動き・筋の機能を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【足関節・足部各論】 足部の構成、距腿および距踵関節の構成		
	3-4	【足関節・足部各論】 足関節の運動、足関節の筋と機能		
	5-6	【足関節・足部各論】 足関節・足部の筋と機能		
	7-8	【足関節・足部各論】 足関節の安定性、歩行時足関節筋群活動		
	9-10	【手関節・手各論】 手関節と手の骨構成		
授業方法	板書を中心に講義を行う。足関節・足部および手関節・手を中心とした人体構造や3次元的な動きを視覚的に捉えて理解することを目的としている。			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	機能解剖学はその後に履修する運動療法や整形外科、スポーツ外傷・傷害学、疾患別理学療法の基礎をなすため、広範囲かつ詳細な理解が重要である。			
教科書等	特に指定しない			
参考図書等	小関博久（編）『外来整形外科のための退行変性疾患の理学療法』 医歯薬出版			
関連科目	運動学Ⅰ・Ⅱ・整形外科Ⅰ・Ⅱ（2年）、スポーツ外傷・傷害学（2年）、臨床スポーツ医学（2年）、整形外科Ⅲ・Ⅳ（3年）			
コアカリキュラム対応	C-2-1			
最近の国試出題傾向	手関節・手および足関節・足部の周囲筋機能・起始・停止・神経支配、手根管、手のアーチ、手の変形、足関節の安定性や歩行時足関節筋活動などが頻出			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	機能解剖学Ⅲ			単位数	3	時間数	64
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	平田 史哉 多米 一矢 鴨下 亮太						

授業の概要	1. 肩関節・肘関節および脊柱、体幹部の解剖学的構造を機能を視覚的に理解し、その関節を動かす筋の機能についてより細部にわたって理解することを目的としている。 2. 体幹は両下肢の上に位置し、体幹の安定性は末梢部に影響を与える。体幹の構造と運動メカニズムを理解し、末梢部に与える影響を理解させる。また、体幹の構造の一部である腰部や胸部の筋や構成、運動および安定化メカニズムを学ぶとともに、その上に位置する頭頸部についても理解を深める。また、体幹と密接に関与している最大の可動域を有する肩関節、その肩関節と手関節の間に位置する肘関節についても、その構成や運動および安定化メカニズムについて深く学習する。			
学習到達目標	1. 肩関節・肘関節の構造・機能・役割・動き・筋の機能を理解する。 2. 脊柱の一般的な構造と腰椎の特徴および機能・役割・動き・筋の機能を理解する。 3. 胸部の構成や役割、動きについて学び、筋機能および体幹の安定化メカニズムを理解する 4. 頸椎の構成・特徴・動き・役割・筋機能について理解する			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【肩関節各論】 肩関節の構成・臼蓋上腕関節の構成	17-18	【胸部各論】 胸部周囲筋・インナーユニットの機能
	3-4	【肩関節各論】 臼蓋上腕関節周囲筋・肩甲上腕リズム	19-20	【胸部各論】 胸部周囲筋・インナーユニットの機能
	5-6	【肩関節各論】 肩甲上腕関節と肩甲胸郭関節の構成	21-22	【胸部各論】 胸部周囲筋・インナーユニットの機能
	7-8	【肩関節各論】 肩甲胸郭関節の筋、肩関節の指標	23-24	【頸椎各論】 頸椎の解剖と運動・椎間板への応力
	9-10	【肩関節各論】 肩甲胸郭関節の筋、肩関節の指標	25-26	【頸椎各論】 頸椎の屈筋群と伸筋群の役割
	11-12	【脊柱総論】 脊柱の基本形態と構成体・制動要素	27-28	【頸椎各論】 頸椎の屈筋群と伸筋群の役割
	13-14	【腰椎・下部体幹各論】 腰椎の解剖・伸筋群と屈筋群の機能	29-30	【総括Ⅰ】 肩関節複合体について
	15-16	【腰椎・下部体幹各論】 腰椎の解剖・伸筋群と屈筋群の機能	31-32	【総括Ⅱ】 脊柱について
授業方法	板書を中心に講義を行う。足関節・足部および手関節・手を中心とした人体構造や3次元的な動きを視覚的に捉えて理解することを目的としている。			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	機能解剖学はその後に履修する運動療法や整形外科、スポーツ外傷・傷害学、疾患別理学療法の基礎をなすため、広範囲かつ詳細な理解が重要である。			
教科書等	特に指定しない			
参考図書等	小関博久（編）『外来整形外科のための退行変性疾患の理学療法』 医歯薬出版			
関連科目	運動学Ⅰ・Ⅱ・整形外科Ⅰ・Ⅱ（2年）、スポーツ外傷・傷害学（2年）、臨床スポーツ医学（2年）、整形外科Ⅲ・Ⅳ（3年）			
コアカリキュラム対応	C-2-1			
最近の国試出題傾向	手関節・手および足関節・足部の周囲筋機能・起始・停止・神経支配、手根管、手のアーチ、手の変形、足関節の安定性や歩行時足関節筋活動などが頻出			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	生理学Ⅰ			単位数	2	時間数	40
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	市野 素英 ○生理学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	生理学は、人体の機能（からだの働き）を学習する科目である。 扱う内容は広範囲に亘るが、いずれも他の教科の履修に必要な基礎知識となる。 便宜的に、生理学を「生理学Ⅰ（前期）」と「生理学Ⅱ（後期）」に分ける。			
学習到達目標	1. 各器官系を構成する細胞の構造と機能を理解する。 2. 各器官系の構造と機能を理解する。 3. 神経系および内分泌系による各器官系の調節システムを理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【細胞の構造と機能】 細胞膜、細胞小器官、物質輸送、 細胞間・細胞内の情報伝達、活動電位	11-12	【排泄－１】 腎臓、ネフロン、尿の生成 尿路、膀胱
	3-4	【体液－１】 体液概論 血漿、赤血球	13-14	【排泄－２】 排尿反射 排便反射
	5-6	【体液－２】 白血球、免疫 血液凝固、血液型	15-16	【体液の酸塩基平衡】 アシドーシス、アルカローシス 呼吸性代償、腎性代償
	7-8	【呼吸－１】 呼吸運動、ガス交換、ガスの運搬 肺胞、肺容量の分画、努力肺活量	17-18	【消化・吸収－１】 内臓平滑筋、消化管運動 咀嚼・嚥下、胃
	9-10	【呼吸－２】 呼吸の神経性調節、呼吸の化学的調節 運動時の呼吸	19-20	【消化・吸収－２】 膵臓、肝臓、胆嚢、小腸、大腸 栄養素の消化・吸収
授業方法	スライドや配付資料を用いた講義			
成績評価の方法	筆記試験70%、小テスト30%			
履修上の留意点	生理学で履修する「からだの働き」は、はさまざまな現象が、構造的かつ時間的に関連して成り立っている。一つの現象を理解できないと、それに繋がる事象が理解できない。結果的に生理学が理解できなくなる。			
教科書等	岡田隆夫・長岡正範 共著 『標準理理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学第4版』 医学書院			
参考図書等	解剖学や運動学の教科書を参照すること。基本的な事項は、高等学校の生物学の教科書・参考書で復習するとよい。			
関連科目	解剖学(1年)、病理学（1年）、内科学（2、3年）、整形外科（2、3年）、神経内科学（2、3年）			
コアカリキュラム対応	C-1-1,C-1-2			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	生理学Ⅱ			単位数	2	時間数	40
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	市野 素英 ○生理学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	生理学は、人体の機能（からだの働き）を学習する科目である。この科目を受講した学生は、アミノ酸とタンパク質、糖質や脂質の構造と機能について説明できるようになる。また、内臓各器官の構造と機能についても説明することができるようになる。さらに、神経系の興奮や各器官の役割についても理解する。			
学習到達目標	・ 三大分子の構造と機能について理解する。 ・ 各器官系の構造と機能を理解する。 ・ 神経系および内分泌系による各器官系の調節システムを理解する。			
授業内容	回	内容	回	内容
	1-2	【三大分子の構造と機能について】 物質代謝、エネルギー代謝、呼吸商 体温調節、アミノ酸、タンパク質など	11-12	【末梢神経系－２】 シナプス、興奮の伝達、伝達物質 神経筋接合部、自律神経系
	3-4	【内分泌－１】 視床下部、下垂体、甲状腺、上皮小体 副腎皮質、副腎髄質	13-14	【中枢神経系－１】 脊髄、筋受容器、脊髄反射 脳幹、姿勢反射、自律神経中枢
	5-6	【内分泌－２】 膵臓、性腺、消化管、腎臓 松果体、ビタミン	15-16	【中枢神経系－２】 小脳、視床、視床下部、基底核、辺縁系 大脳皮質、運動野、感覚野、脳波
	7-8	【生殖と発生】 男性生殖器、女性生殖器 受精、着床、出産	17-18	【感覚－１】 感覚受容器、感覚単位、受容器電位 体性感覚、内臓感覚
	9-10	【末梢神経系－１】 ニューロン、軸索、興奮の伝導 伝導速度、閾値、神経線維の分類	19-20	【感覚－２】 特殊感覚、視覚、聴覚、平衡感覚 味覚、嗅覚、感覚伝導路
	授業方法	スライドや配付資料を用いた講義		
成績評価の方法	筆記試験70%、小テスト30%			
履修上の留意点	生理学で履修する「からだの働き」は、はさまざまな現象が、構造的かつ時間的に連関して成り立っている。一つの現象を理解できないと、それに繋がる事象が理解できない。結果的に生理学が理解できなくなる。			
教科書等	岡田隆夫・長岡正範 共著　『標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　生理学第４版』　医学書院			
参考図書等	解剖学や運動学の教科書を参照すること。 基本的な事項は、高等学校の生物学の教科書・参考書で復習するとよい。			
関連科目	解剖学(１年)、病理学（１年）、内科学（２、３年）、整形外科（２、３年）、神経内科学（２、３年）			
コアカリキュラム対応	C-1-1、C-1-2			
最近の国試出題傾向	生理学の全範囲に亘って出題されている。 出題頻度が高い分野は、神経系、感覚、骨格筋などである。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	運動学Ⅰ			単位数	3	時間数	64
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	高柳 清美、原田 憲二 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	運動学とは何かについて学び、ヒトの正常な姿勢、運動と動作について力学、動力学、解剖学、機能解剖学的に学び、障害を持つことによってどのような運動の異常が生じるかなど、理学療法士にとって必要となる運動学の知識と評価方法を習得する。			
学習到達目標	1. 関節力学についての理解を深める。 2. 姿勢の表現、評価についての理解を深める。 3. 歩行の観察、評価についての理解を深める。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【概論】 ・運動学とは ・運動学の歴史	17-18	【肩関節】 ・肩関節の解剖、運動学など
	3-4	【生体の構造と機能】 ・関節の構造と機能 ・腱および靭帯の構造と機能	19-20	【肘関節】 ・肘関節の解剖、運動学など
	5-6	【股関節】 ・股関節の解剖、運動学など	21-22	【肘関節】 ・肘関節の解剖、運動学など
	7-8	【股関節】 ・股関節の解剖、運動学など	23-24	【手、指節関節】 ・手関節の解剖、運動学など
	9-10	【膝関節】 ・膝関節の解剖、運動学など	25-26	【脊柱】 ・椎間関節の解剖、運動学など
	11-12	【膝関節】 ・膝関節の解剖、運動学など	27-28	【姿勢制御】 ・重力と姿勢 ・姿勢制御機構
	13-14	【足関節】 ・足関節の解剖、運動学など	29-30	【姿勢制御】 ・重力と姿勢 ・姿勢制御機構
	15-16	【肩関節】 ・肩関節の解剖、運動学など	31-32	【歩行】 ・正常歩行のメカニズム
授業方法	講義と実習を併せて実施する。			
成績評価の方法	筆記試験(80%)、レポート(20%)			
履修上の留意点	動きやすい服装での参加が望ましい。			
教科書等	基礎運動学 理学療法ハンドブック			
参考図書等	資料配布			
関連科目	解剖学(1年)、生理学など、その他、多くの科目と関連する。			
コアカリキュラム対応	C-2-1,C-2-2,C-2-3,C-2-4			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	人間発達学			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	原 隆之						

授業の概要	医療・福祉現場においては人の誕生から死までの全生涯を扱い、各段階における状態像や課題に触れることから、発達に関する知識は不可欠である。本科目では、胎児期、乳幼児期、小児期、青年期、成人期、老年期といったライフステージを通じた人間発達を理解することを目的とする。			
学習到達目標	・胎生期、乳幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期、それぞれにおける発達過程について説明することができる。 ・人間発達における各機能の発達について、説明することができる。 ・社会生活活動の発達について、説明することができる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	発達の概念 人間発達における各機能の発達① （身体・姿勢・移動動作の発達）		
	3-4	人間発達における各機能の発達② （目と手の協調の発達、認知機能の発達）		
	5-6	社会生活活動の発達 （食事動作の発達、排泄行動の発達、更衣・整容動作の発達）		
	7-8	発達にともなう反射（原始反射など）		
	9-10	発達の諸段階と発達課題 （胎生期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期）		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	発達について、複数の視点から捉えるよう意識して臨むこと。			
教科書等	資料を配布する			
参考図書等	「標準理学療法学・作業療法学 人間発達学 第2版」医学書院			
関連科目	小児科学(3年)、疾患別理学療法Ⅳ(3年)、疾患別理学療法Ⅶ(3年)			
コアカリキュラム対応	C-3-1,C-3-2,C-3-3,C-3-4,C-3-5,C-3-6,C-3-7			
最近の国試出題傾向	例年、数問の出題あり (小児、正常発達など)			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	病理学			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	伊藤 春雄 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	病理学は疾病の原因とその成り立ちについての学問である。本科目では、各々の疾病に関して進行・予後を知るために、その原因と生体反応について理解することを目的とする。			
学習到達目標	・細胞・組織損傷、炎症、感染、呼吸器障害、循環障害、栄養・代謝障害、腫瘍、廃用症候群について説明することができる。 ・疾病の定義と分類について説明することができる。 ・病因論や病理学的変化について説明することができる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	病因とは 進行性病変 退行性病変		
	3-4	代謝異常（栄養の基礎含む） 循環障害 免疫 アレルギー 放射線障害		
	5-6	老化 炎症		
	7-8	感染症 腫瘍①		
	9-10	腫瘍② まとめ		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（100％）に課題ノートを加味して評価する。			
履修上の留意点	下記関連科目との関わりを意識しながら学んでいくこと。			
教科書等	「標準理学療法学・作業療法学 病理学 第4版」医学書院			
参考図書等	「ロビンズ基礎病理学 原著7版」丸善出版			
関連科目	解剖学Ⅰ（1年）、解剖学Ⅱ（1年）、解剖学Ⅲ（1年）、生理学Ⅰ（1年）、生理学Ⅱ（1年）			
コアカリキュラム対応	C-4-1,C-4-2,C-4-3,C-4-4,C-4-5,C-4-6,C-4-7,C-4-8,C-4-9,D-1-2,D-2-1,D-14-2			
最近の国試出題傾向	例年、数問が出題 (炎症、感染症、腫瘍が頻出)			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	リハビリテーション概論			単位数	2	時間数	40
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	齋藤 育洋 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	1. 本科目の目的は「リハビリテーションとは何か」という根幹に触れ、理学療法士としてどのような心構えが必要であるかなどについて考えを深化させることである。 2. 関連職種の役割にも触れ、チーム医療の意識を持ちリハビリテーションに携わることのできる能力を習得する。			
学習到達目標	1. リハビリテーションとは何かを説明できる。 2. リハビリテーションに関わる疾病、社会保障制度、関連職種について、概要を説明できる。 3. リハビリテーションの段階と、それに準ずる心理について説明できる。 4. 地域リハビリテーションについて説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	リハビリテーションとは ・リハビリテーションの定義、目的、理念歴史など	11-12	リハビリテーションの過程 ・評価、プログラム、手段など ・チームアプローチと多職種連携の理解
	3-4	病気と障害 ・病気と障害の関係など	13-14	機能障害をもたらす主な疾病と外傷 ・身体障害、精神障害、知的障害など
	5-6	人間活動と発達 ・発達、ノーマライゼーションなど ・ライフサイクルにおける発達の特色など	15-16	【リハビリテーションを支える社会保障制度】 ・保健・医療制度、社会保険制度など ・高齢者対策など
	7-8	リハビリテーションと心理 ・心理的適応の過程など ・障害受容など	17-18	地域リハビリテーションについて ・自立支援、就労支援など
	9-10	リハビリテーションの諸段階 ・発症から社会生活など	19-20	高齢者との接し方 ・高齢者の特徴、接し方など
授業方法	講義、グループワーク			
成績評価の方法	筆記試験で評価する（100％）。			
履修上の留意点	他科目との関連を考慮しながら、受講することを求める。			
教科書等	資料配布			
参考図書等	理学療法ハンドブック、リハビリテーション概論			
関連科目	理学療法概論(1年)、理学療法評価概論(1年)その他、多くの科目と関連します。			
コアカリキュラム対応	D-3-1,D-3-2,D-3-3,D-3-4			
最近の国試出題傾向	ICF、ノーマライゼーションなどが散見される。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	理学療法概論			単位数	2	時間数	40
科目区分	専門分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	佐野 純平 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	わが国における理学療法の歴史は浅く、未だ組織として十分に社会的に認識されているとは言い難い。今後の理学療法の発展を考える場合、個々の理学療法士の態度や職務の実践が大きな役割を果たすことに議論の余地はない。本科目の目的は、これからの理学療法のあり方を考えることを目的とする。			
学習到達目標	・理学療法の定義について説明できる。 ・理学療法士に求められるさまざまな役割、法的義務について説明できる。 ・良質な理学療法の提供に向けて質を保証する必要性、生涯にわたる自己研鑽の必要性が説明できる。 ・理学療法士及び作業療法士法について説明でき、医師法や保健師助産師看護師法との関係について説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【理学療法士としての適性】 ・適性の基本概念など ・理学療法の質の保証	11-12	【理学療法士の法律制度】 ・理学療法士身分制度の意義 ・法的使命と役割
	3-4	【理学療法学教育】 ・理学療法カリキュラムの変遷など ・生涯学習の有意義性	13-14	【理学療法士の役割と職域】 ・日本における現状など
	5-6	【理学療法の歴史】 ・近代医療における理学療法など	15-16	【理学療法の学問的体系化と研究法】 ・学問的体系化の歩みなど ・理学療法における研究の意義
	7-8	【理学療法の対象と治療手段】 ・代表的対象に対するアプローチ	17-18	【理学療法と倫理・哲学】 ・職業倫理、医療倫理など
	9-10	【理学療法の基盤】 ・理学療法に関わる国際分類など	19-20	【理学療法部門における管理】 ・理学療法部門の管理など ・安全性の管理
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)にて評価する。			
履修上の留意点	理学療法の全体像について理解しておくことが望ましい。			
教科書等	資料配布			
参考図書等	奈良勲 『理学療法概論 第5版』 医歯薬出版株式会社 嶋田智明 『概説理学療法』 文光堂			
関連科目	理学療法評価概論(1年)、リハビリテーション概論（１年）その他、多くの科目と関連する。			
コアカリキュラム対応	A-1-1,A-1-2,A-1-3,A-1-4,A-2-2,A-4-1,A-4-2,A-5-1,A-5-2,A-5-3,B-4-4,B-5-1,B-5-2,B-5-3,B-5-4,B-6-3,E-1-1			
最近の国試出題傾向	国際生活機能分類、理学療法士及び作業療法士法に関連する問題は頻出である。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	運動療法基礎学Ⅰ			単位数	1	時間数	24
科目区分	専門分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	原 隆之 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	1. 運動療法は、理学療法の最も大きな柱として位置付けられている。解剖学や生理学、運動学あるいは病理学などを背景に、理学療法士が得意としない分野である。 2. 本科目の目的は、2～3年次に学ぶ各論に向けて、運動療法の基礎的な知識を習得することである。			
学習到達目標	1. 運動療法の歴史を振り返り、現代の運動療法の背景を知る。 2. 運動療法の目的、対象、方法を理解する。 3. 運動に関連する諸要素を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【運動療法の概念】 ・歴史、代表的な器具の紹介など ・目的、定義、種類など	11-12	【運動療法の基礎】 ・運動学習など
	3-4	【運動療法の基礎】 ・関節の構造と運動など ・関節可動域制限の分類		
	5-6	【運動療法の基礎】 ・筋収縮のメカニズムなど ・筋力低下の分類		
	7-8	【運動療法の基礎】 ・随意運動・運動制御のメカニズムなど		
	9-10	【運動療法の基礎】 ・運動制御のメカニズムなど		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（100％）で評価する。			
履修上の留意点	解剖学・生理学と平行して学習すること。			
教科書等	資料配付			
参考図書等	基礎運動学 理学療法ハンドブック 奈良勲 『標準理学療法学 専門分野 運動療法学 総論 各論 第3版』 医学書院			
関連科目	解剖学(1年)、生理学Ⅰ・Ⅱ(1年)、運動学(1・2年)、病理学(1年)などその他、多くの科目と関連します。			
コアカリキュラム対応	C-2-1,C-2-3,C-2-4			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	理学療法評価概論			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	原田 憲二 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	評価とは、患者の症状や障害を把握して将来を予測する過程である。評価は、誰が行っても同一の結果が得られるような方法であり、信頼性や妥当性のある標準化されたものが求められる。本科目では、理学療法評価の概論的な部分や方法論などを理解することを目的とする。			
学習到達目標	1. 理学療法における評価のあり方を理解する。 2. 理学療法における評価の目的を理解する。 3. 理学療法における評価の重要性を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【理学療法と障害】 ・ 理学療法における評価 ・ 理学療法と障害		
	3-4	【理学療法の対象】 ・ 理学療法の倫理 ・ 理学療法の対象		
	5-6	【評価の目的と構成要素】 ・ 理学療法士の使命 ・ 評価の目的		
	7-8	【評価の流れ】 ・ 評価の具体的なプロセス ・ 理学療法の記録		
	9-10	【評価における注意点】 ・ 情報の整理と記録 ・ 種皮銀寿		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（80％）、小テスト（20％）			
履修上の留意点	教科書、参考図書に目を通しておくことが望ましい。			
教科書等	細田多穂『理学療法概論テキスト』改訂第3版 南江堂			
参考図書等	細田多穂 理学療法ハンドブック			
関連科目	検査測定学(1・2年)、理学療法概論(1年)、リハビリテーション概論(1年)、総合臨床実習Ⅰ・Ⅱ(4年生)			
コアカリキュラム対応	E-3-1			
最近の国試出題傾向	ICFなどは頻出傾向である			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	検査測定学Ⅰ			単位数	1	時間数	44
科目区分	専門分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	実習
担当講師	佐野 純平 植竹 駿一 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	人の身体運動は個々の関節運動により構成されており、人の動作を的確に捉えるには、関節の運動域（関節可動域）を知る必要がある。本科目では、対象者の関節可動域の測定を、正確かつ迅速に測定する技術を習得することを目的とする。また、関節可動域制限の原因やその改善方法まで考えられる力を養う。			
学習到達目標	・ 関節可動域測定における基本軸・移動軸・参考可動域を説明できる。 ・ 関節可動域測定の手技や手順を実施できる。 ・ 関節可動域の制限因子について説明できる。 ・ 関節可動域制限の程度と関連要因を把握する評価が実施できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	総論 (関節可動域測定の定義と目的)	13-14	下肢の測定② (足、足部について)
	3-4	参考可動域 関節可動域測定と制限因子	15-16	下肢の測定③ (母趾、足趾について)
	5-6	上肢の測定① (肩甲帯、肩、肘、前腕について)	17-18	体幹の測定① (胸腰部について)
	7-8	上肢の測定② (前腕、手について)	19-20	体幹の測定② (頸部について)
	9-10	上肢の測定③ (指、母指、別法について)	21-22	臨床応用 (代償運動への対応/各変形に対する測定)
	11-12	下肢の測定① (股、膝について)		
授業方法	実技形式			
成績評価の方法	筆記試験(50%)ならびに実技試験(50%)			
履修上の留意点	実習着着用、医療人としてふさわしい身だしなみで授業に参加すること(頭髮、爪、装飾品など)			
教科書等	「理学療法評価学 改訂第6版」金原出版			
参考図書等	「ROM測定法」MEDICAL VIEW 「基礎運動学 第6版 補訂」医歯薬出版			
関連科目	解剖学Ⅰ(1年)、機能解剖学Ⅰ(1年)、機能解剖学Ⅱ(1年)、運動学Ⅰ(1年) その他多くの科目と関連			
コアカリキュラム対応	E-4-1			
最近の国試出題傾向	例年、実地問題を含む7～8割が出題 (基本軸、移動軸、参考可動域、代償運動など)			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	見学実習			単位数	1	時間数	45
科目区分	専門分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	実習
担当講師	理学療法学科専任教員／実習施設指導者 ○理学療法士の実務経験に基づく指導						

授業の概要	見学実習では、実際に病院やクリニックに赴いて、理学療法士の役割・対象者との関係性の構築・他部門との関わり方などについて見学する。その中で、理学療法現場における清潔で適切な身だしなみ・共感的態度・ルール遵守などの重要性を理解する。						
学習到達目標	・理学療法士と対象者の関係性の構築方法を理解する。 ・他部門との関わり方を見学し、チーム医療の重要性を理解する。 ・理学療法の進め方を理解する。						
授業内容	内容						
	朝のカンファレンスの見学 患者の迎え方 情報収集の方法 理学療法(評価・物理療法を含む)の実際 他部門との協働 問題が生じた場合の対応方法 その他 これらを見学し、理学療法士としての働くうえでの1日の流れ・理学療法士の存在意義などについて学ぶ。						
授業方法	実習形式						
成績評価の方法	臨床実習報告書の内容から評価を点数化し成績とする。						
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい						
教科書等	特になし						
参考図書等	特になし						
関連科目	コミュニケーション論 地域リハビリテーション実習						
コアカリキュラム対応	F-1～4						
最近の国試出題傾向	対象者との信頼関係の結び方などは毎年出題される。						

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	医療倫理			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	高柳 清美						

授業の概要	保健医療にかかわる専門家として、生命の尊厳や臨床に関わる倫理観を身に付ける。現代医療は患者自身の自己決定権を重要視し、旧来に行われていたパターナリズム(父権主義)に則った医療従事者の決定は否定されつつある。これらの時代的変遷を学ぶとともに具体的な臨床現場で遭遇する倫理問題を理解する。			
学習到達目標	1. 生命、医療倫理観を身に付ける。 2. 患者の意思決定の倫理的に理解する。 3. 現代医療の臨床場面における倫理問題を説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	倫理学とは何か。 ・医療における倫理とは ・職業倫理について		
	3-4	医療倫理の4原則 ・4原則の成立背景 ・自己決定とパターナリズム		
	5-6	臨床研究と倫理		
	7-8	臨床倫理の方法論 ・4分割法 ・ナラティブアプローチ		
	9-10	終末期と死に関する倫理問題 小児医療における倫理問題 社会の理解		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点				
教科書等	適宜資料を配布			
参考図書等	特になし			
関連科目	哲学			
コアカリキュラム対応	A-1-2, A-1-3、B-5-4, D-1-1			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	コミュニケーション論			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	佐野 純平						

授業の概要	人が健全に社会生活を営むには、人間性豊かな自己形成を軸に心理・社会的背景を踏まえながら、人々と相互に信頼された関係を築き、個々が意思決定することが肝要である。そのためにお互いを認知・共感・理解し有効な関係を築くコミュニケーション能力を養う。			
学習到達目標	1. コミュニケーションとは何かを理解する。 2. 臨床におけるコミュニケーション能力を養う。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	コミュニケーション能力とは コミュニケーションの構造について理解を深める。		
	3-4	コミュニケーションにおける情報管理 知りえた情報の発信、記録、保存について知る。		
	5-6	コミュニケーション演習① コミュニケーション技法について学ぶ。		
	7-8	コミュニケーション演習② 療法士面接について学ぶ。		
	9-10	コミュニケーション演習③ 臨床現場を想定したコミュニケーションを経験する。		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	課題レポート(100%)			
履修上の留意点	日常生活からコミュニケーションを意識しておくこと。			
教科書等	資料を配布する。			
参考図書等	「医療者のためのコミュニケーション入門」精神看護出版 「理学療法コミュニケーション論」医歯薬出版			
関連科目				
コアカリキュラム対応	A-6-1, A-6-2, A-6-3			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	スポーツ社会学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	河野 隆志						

授業の概要	スポーツの高度化において、医・科学の知識や技能は必要不可欠であり、スポーツ現場では、様々な医・科学スタッフが活動している。また、スポーツ現場で活動する上では、スポーツがどのように社会的に捉えられているのかを理解することが必要である。それを考察する手がかりとして、スポーツ界の最新のトピックや動向などについて情報提供を行う。			
学習到達目標	・スポーツの本質を理解し、現代社会におけるスポーツの捉え方について多角的な視点から考察できる。 ・スポーツ理学療法の概要と考え方について説明できる。 ・障がい者スポーツ支援の概要と理学療法士の役割において説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	スポーツの価値や役割について これまでの実体験や知見を通してスポーツの価値や役割について考える		
	3-4	スポーツを通しての国家形成 国家形成においてスポーツが用いられた事例をもとにスポーツを考える		
	5-6	我が国のスポーツ政策と強化拠点 JISSやNTCの施設紹介を通して社会におけるエリートスポーツの役割を理解する		
	7-8	ビックスポーツイベントの裏側 ビックスポーツイベント開催がもたらす経済的・社会的・政治的効果等を解説		
	9-10	スポーツの価値や役割を考える スポーツに関する題材をもとにその社会的な価値や役割について考える		
授業方法	パワーポイント・映像視聴			
成績評価の方法	レポート課題（50％）グループワーク（40％）、授業への取り組み（10％）			
履修上の留意点	多角的な視点からスポーツの価値や役割について考察をするため、積極的に意見や見解、疑問点などを述べてもらいたい。			
教科書等	特になし			
参考図書等	特になし			
関連科目	体育実技Ⅰ（1年）、体育実技Ⅱ（2年）、体育実技Ⅲ（3年）			
コアカリキュラム対応	E-7-9			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	体育実技Ⅱ			単位数	1	時間数	40
科目区分	基礎分野	対象年次	2	学期	通年	授業形態	実習
担当講師	本多 尚基 河野 隆志			○体育教育の実務経験に基づく講義			

授業の概要	スポーツにおける理学療法士の役割は、リハビリテーションだけにとどまらず、個人およびチームの技術やパフォーマンスの向上についても求められる。そこで本科目では、各スポーツ種目における戦略・戦術の知識やチームプレーなどの理解を深める。				
学習到達目標	・各スポーツ種目を分類化し、それぞれの特性が説明できるようになる。 ・各スポーツ種目における戦略・戦術の解説・考案ができる。 ・競技スポーツについて説明できる。				
授業内容	回	内 容	回	内 容	
	1-2	体力測定 体力測定を実践し、現在の体力レベルを認識する	11-12	ネット型種目1 ・基礎的技術の習得 ・チームプレーの理解	
	3-4	ゴール型種目1 ・基礎的技術の習得 ・チームプレーの理解	13-14	ネット型種目1 ・戦略や戦術の解説・考案 ・ゲームの実践とその運用	
	5-6	ゴール型種目1 ・戦略や戦術の解説・考案 ・ゲームの実践とその運用	15-16	ネット型種目2 ・基礎的技術の習得 ・チームプレーの理解	
	7-8	ゴール型種目2 ・基礎的技術の習得 ・チームプレーの理解	17-18	ネット型種目2 ・戦略や戦術の解説・考案 ・ゲームの実践とその運用	
	9-10	ゴール型種目2 ・戦略や戦術の解説・考案 ・ゲームの実践とその運用	19-20	総括 体育実技を通して身体活動の役割や意義を理解する	
授業方法	実技種目の選定については、1年次の実施状況及び体力測定の結果などを踏まえて決定する。 そのため、必ずしも上記の順番ではない。				
成績評価の方法	体力測定、実技実施状況、授業内発表とレポート課題（100％）				
履修上の留意点	授業に出席する際は運動に適した格好で臨み、室内履きを着用すること。安全面上、室内履きを忘れた場合は参加不可とする。なお、ピアスや貴金属など実技を行う上で危険性の高いものの着用は認めない。				
教科書等	特になし				
参考図書等	特になし				
関連科目	体育実技Ⅰ（1年）　健康科学（1年）　体育実技Ⅲ（3年）　スポーツ社会学(2年)				
最近の国試出題傾向	特になし				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	医学英語Ⅰ			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	浅田 幸善 ○英語教育の実務経験を活かした講義						

授業の概要	関連分野の英文を読みながら、理学療法士（PT）が必要とする基本的専門語や表現を学んでいく。 病院など、PTが活動する場所で遭遇するシチュエーションを想定した会話を随時採り入れる。			
学習到達目標	理学療法士として身につけておきたい医学・解剖学・医療分野の基本的専門語彙を習得する。その際、専門語に対応する日常語がある場合はそれらも学習する。 また、実際の場面に即した会話例に触れ、さまざまなコミュニケーションのパターンに慣れるようにする。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	1年時学習事項の復習・確認 授業の概要説明 人体のしくみ（骨格）		
	3-4	人体のしくみ（骨・骨折）		
	5-6	人体のしくみ（筋肉；筋肉系）		
	7-8	人体のしくみ（関節・神経）		
	9-10	身体の動き（動作・姿勢・運動） 前期のまとめ		
授業方法	講義			
成績評価の方法	語彙小テスト（20%）、期末試験（70%）の割合で評価する。評価は、100点満点に換算して、優（80点以上）、良（70～79点）、可（60～69点）、不可（60点未満）とする。			
履修上の留意点	授業を受けているだけでは、英語力の向上は望めないので、授業外での学習にも期待します。			
教科書等	特になし			
参考図書等	必要な教材・資料は授業中に配布する			
関連科目	英会話（1年）			
最近の国試出題傾向	特になし			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	医学英語Ⅱ			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	浅田 幸善 ○英語教育の実務経験を活かした講義						

授業の概要	関連分野の英文を読みながら、理学療法士（PT）が必要とする基本的専門語や表現を学んでいく。 病院など、PTが活動する場所で遭遇するシチュエーションを想定した会話を随時採り入れる。			
学習到達目標	理学療法士として身につけておきたい医学・解剖学・医療分野の基本的専門語彙を習得する。その際、専門語に対応する日常語がある場合はそれらも学習する。 また、実際の場面に即した会話例に触れ、さまざまなコミュニケーションのパターンに慣れるようにする。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	エクササイズ・ストレッチング・トレーニング		
	3-4	診断～治療		
	5-6	リハビリ・身体機能回復		
	7-8	障害・けが・病気；痛み		
	9-10	理学療法士の役割 まとめ		
授業方法	講義			
成績評価の方法	語彙小テスト（20%）、期末試験（70%）の割合で評価する。評価は、100点満点に換算して、優（80点以上）、良（70～79点）、可（60～69点）、不可（60点未満）とする。			
履修上の留意点	授業を受けているだけでは、英語力の向上は望めないので、授業外での学習にも期待します。			
教科書等	特になし			
参考図書等	必要な教材・資料は授業中に配布する			
関連科目	英会話（1年）			
最近の国試出題傾向	特になし			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	運動学Ⅱ（生体力学）			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	植竹 駿一 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	近年、リハビリテーション分野において動作分析装置などの機器を駆使して、患者のパフォーマンス指数を収集し治療計画に反映させている。人間工学の中の生体力学について、力学の基礎と力学の生体への応用を学習し、その生体力学から姿勢や身体の動作を理解し、ヒトの動作を工学的に分析する能力を習得することを目的とする。			
学習到達目標	・ 生体力学に関する基礎知識を説明することができる。 ・ ヒトの動作を工学的に分析する方法を適用することができる。 ・ 運動療法に必要な力学的知識を工夫することができる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【概要】 力とは何か 力の合成		
	3-4	【力学に必要な知識】 運動法則について		
	5-6	【力学の計算問題】 テコ 正弦・余弦		
	7-8	【運動の力学】 寝返り・起き上がり		
	9-10	【運動の力学】 立ち上がり・歩行		
授業方法	講義、計算演習			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	授業計画に沿って資料を配布する。講義後は配布資料や教科書を用いて復習を行うこと。			
教科書等	「理学療法ハンドブック」協同医書出版			
参考図書等	「基礎運動学」医歯薬出版 筋骨格系のキネシオロジー 運動の成り立ちとは何か			
関連科目	運動療法学Ⅰ・Ⅱ 動作分析学			
コアカリキュラム対応	C-2-1),C-2-2)			
最近の国試出題傾向	計算式問題として1問出題。単位の用語について過去出題			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	運動学実習			単位数	1	時間数	44
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	通年	授業形態	実習
担当講師	原 隆之 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	人間はさまざまな活動（運動）を営むことができる生物ということを理解できるようになるため、人間の活動（運動）を細分化し、その基本的なメカニズムを学ぶ必要がある。その為には、関節運動・基本動作のメカニズムについて理解・説明できる必要がある。また、関節運動のメカニズムを理解した上で実際に関節運動・基本動作の評価からその動作に至っている理論的背景を説明することを目的とする。				
学習到達目標	・四肢・体幹の関節運動のメカニズムを説明し、運動に関わる運動器の触診ができる ・基本動作（寝返り、起き上がり、立ち上がり、歩行）について説明しその活動を記録できる ・運動制御の理論的背景について説明し運動学習に至る過程を専門用語を使用して説明ができる ・運動による呼吸・循環・代謝の変化について説明し記録できる				
授業内容	回	内容	回	内容	
	1-2	関節の種類とその運動 触診の基礎（意義、留意点、方法）	13-14	研究内容のオリエンテーション 触察の総復習	
	3-4	骨の触察（体幹・上肢）	15-16	姿勢別の血圧変動について	
	5-6	骨の触察（下肢）	17-18	上肢の関節運動(肩甲上腕リズム)についての評価	
	7-8	上肢の関節運動のメカニズム 上肢の骨格筋の触診	19-20	下肢多関節筋の可動域への影響についての評価	
	9-10	下肢の関節運動のメカニズム 下肢の骨格筋の触診	21-22	異なる立ち上がり動作の相分析	
	11-12	体幹の関節運動のメカニズム 体幹の骨格筋の触診			
授業方法	講義と実習を併せて実施。				
成績評価の方法	実技試験（５０％）ならびに課題レポート（５０％）				
履修上の留意点	実技においては動きやすい服装で受講すること。				
教科書等	基礎運動学補訂第6版、理学療法ハンドブック第1～4巻				
参考図書等	特になし				
関連科目	運動学Ⅰ(1年)、解剖学(1年)、生理学Ⅰ・Ⅱ(1年)など				
コアカリキュラム対応	C-2-1, C-2-2, C-2-3, C-2-4				
最近の国試出題傾向	基礎医学・臨床医学分野において１３％の出題率				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	運動生理学			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	刈谷 文彦						

授業の概要	理学療法を行う上で、運動による行動体力要素に関する事柄や、身体活動量の増減に伴う生体の変化などを生理学的視点から観察・考察をしていくことが重要である。また、運動指導を行う上で、ウォーミングアップやクーリングダウンの生理的意義や運動制御理論の説明を行えることが理学療法を行う上で重要な要素となる。			
学習到達目標	・ 行動大力要素について説明する ・ ウォーミングアップやクーリングダウンの生理的意義について説明する ・ 身体活動量の増減に対する生理的变化について説明する ・ 運動による呼吸・循環・代謝の変化について説明する			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	行動大力要素に関する理解		
	3-4	ウォーミングアップやクーリングダウンの生理的意義の理解		
	5-6	運動制御理論の説明		
	7-8	身体活動量の増減に対する生理的变化についての理解		
	9-10	運動による呼吸・循環・代謝の変化の整理とその理解		
授業方法	講義			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	能動的な態度でのぞむこと			
教科書等	特になし、講義の際にプリントを配布			
参考図書等	運動生理学（石河、杉浦編、建帛社）			
関連科目	生理学Ⅰ・生理学Ⅱ・運動療法Ⅰ			
コアカリキュラム対応	C-2-3, C-2-4			
最近の国試出題傾向	骨格筋の収縮等に関する問題が出題される			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	臨床心理学			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	山際 清貴						

授業の概要	近年、働き方の多様化により他業種との連携が必要となる一方でストレスが増加している。それに伴い、活動におけるモチベーションや不安・抑うつなどの精神・心理機能の問題が急増している。本科目では、精神医学等他の隣接領域との相違を明らかにしつつ、臨床心理学についての基礎的な知識を講義する。その中でも、適応、葛藤や防衛機制、そして心理検査、心理療法などを中心に講義をすすめる。			
学習到達目標	・精神・心理機能のメカニズムについて説明する。 ・活動と身体、認知、感情の関連性を説明する。 ・法制規制等臨床心理学に関連する基礎的概念を説明する。 ・心理検査と心理療法の概略を説明する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	精神医学との違いを含めた臨床心理学の理解と精神疾患の整理		
	3-4	心理検査の信頼性と妥当性、標準化の手続きについて		
	5-6	精神分析学、来談者中心療法などの心理療法の実際		
	7-8	適応、葛藤と防衛機制 発達障害等について		
	9-10	心理療法の基礎理論、精神分析学、認知行動療法などの実際		
授業方法	講義方式、なお、心理検査は実物を学生が見ることができるようにし、実施する。			
成績評価の方法	テスト成績(100%)			
履修上の留意点	必ず出席し、復習をすること			
教科書等	資料等を配布予定			
参考図書等	松原達哉編著 図解雑学臨床心理学 ナツメ社 奈良勲・鎌倉矩子 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 臨床心理学 医学書院			
関連科目	精神医学（3年）			
コアカリキュラム対応	C-2-6, D-5-1, D-5-2			
最近の国試出題傾向	適応機制(防衛機制)、心理検査と心理療法についての出題がみられる			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	内科学Ⅰ			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	池田憲 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	内科学は医学そのものと言ってよいほど幅が広く、その習得は決して容易なことではない。本授業では、難解な表現を避けてわかりやすく解説することを心掛ける。具体的には、呼吸器疾患・循環器疾患・血液疾患・自己免疫疾患・感染症・消化器疾患などについて理解を深める。			
学習到達目標	・理学療法士として理解すべき内科系疾患の病因・病態生理・症候・診断・治療を理解する。 ・薬物の作用機序や体内動態の基本的事項を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	呼吸器疾患および循環器疾患に対する問診・画像診断の基礎・記録について		
	3-4	血液疾患および自己免疫疾患に対する問診・画像診断の基礎・記録について		
	5-6	感染症および消化器疾患に対する問診・身体所見・記録について		
	7-8	運動器疾患に対する薬物療法と薬理 神経系疾患に対する薬物療法と薬理		
	9-10	呼吸器疾患および循環器疾患に対する薬物療法と薬理 その他の疾患に対する薬物療法について		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい			
教科書等	標準理学療法学・作業療法学 内科学 第3版			
参考図書等	資料を配布する			
関連科目	内科学Ⅱ 神経内科学Ⅰ 神経内科学Ⅱ			
コアカリキュラム対応	C-5-2 D-2-2 D-2-3			
最近の国試出題傾向	呼吸器疾患および循環器疾患に関する問題が頻出している			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	整形外科Ⅰ			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	小関博久 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	運動器疾患を主に対象とする。整形外科の分野は広く、リハビリテーション医学を学ぶ上で重要である。一方で疾病や外傷にはバリエーションがあり、すべてを網羅することは困難である。本講義では整形外科の基礎として骨や関節構造、診療の基本、手術療法、保存療法について学び、広く疾患の概要について学ぶことを目的とする。			
学習到達目標	・ 整形外科について理解する。 ・ 骨や血管、神経関節構造について理解する。 ・ 診療の基本について理解する。 ・ 検査と治療について理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【骨の構造、生理、化学 ①】 骨の構造、種類 骨の血管と神経支配		
	3-4	【骨の構造、生理、化学 ②】 骨の吸収 骨とビタミン、ホルモン、酵素		
	5-6	【骨の発育、形成、再生】 骨の発生と成長 骨の損傷修復		
	7-8	【関節の構造と生化学】 関節を構成するもの（関節軟骨、関節包、靱帯、滑膜、半月板など）		
	9-10	【関節の病態生理】 関節軟骨、滑膜の生物学的反応 関節包・靱帯の生物学的反応		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい			
教科書等	標準理学療法学・作業療法学 整形外科 第4版			
参考図書等	資料を配布する			
関連科目	解剖学Ⅰ～Ⅲ、機能解剖学Ⅰ～Ⅲ、運動学Ⅰ・Ⅱ			
コアカリキュラム対応	B-6-1			
最近の国試出題傾向	整形疾患に関する問題は例年出題される。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	整形外科科学Ⅱ			単位数	2	時間数	40
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	小関博久 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	整形外科科学で扱う分野は多岐にわたる。また各疾患でも患者それぞれの病態があり、慎重な診断が必要である。この講義では整形外科科学Ⅰで学んだ知識を基に、整形外科における各疾患についてその概要を理解することを目的とする。			
学習到達目標	・疾患の総論について理解する。 ・各疾患についてその概要を理解する。 ・画像診断について理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【診療の基本】 診療の心得、診療の記録、問診の実際 主訴、主症状から想定すべきこと	11-12	【骨関節、筋肉の疾患】 骨髄炎、結核性骨関節炎、感染性関節炎、人工関節置換術後の感染など
	3-4	【検査】 検査総論 各検査について	13-14	【関節リウマチとその類縁疾患】 関節リウマチ、悪性関節リウマチ、強直性脊椎炎など
	5-6	【保存療法と薬理】 保存療法とは 薬理とは	15-16	【慢性関節疾患】 変形性関節症、痛風、偽痛風、血友病性関節症
	7-8	【手術療法①】 各手術法とその実際	17-18	【代謝性骨疾患】 骨粗鬆症、くる病、成長ホルモン異常症
	9-10	【手術療法②】 手術と固定法、リハビリテーション	19-20	【各疾患における画像診断】 X線画像、CT、MRIなど
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい			
教科書等	標準理学療法学・作業療法学 整形外科科学 第4版			
参考図書等	資料を配布する			
関連科目	解剖学Ⅰ～Ⅲ、機能解剖学Ⅰ～Ⅲ、運動学Ⅰ・Ⅱ			
コアカリキュラム対応	B-6-1			
最近の国試出題傾向	整形外科に関する問題は例年出題される。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	神経内科学Ⅰ			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	池田 憲 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	近年の神経疾患の診断・治療・リハビリテーションは大きな変貌を遂げつつある。具体的には、遺伝子診断や機能画像などの多くの診断技術の進歩、神経系の再生医療などが含まれる。本授業では、神経疾患および有痛性疾患の基礎的な病因・病態生理・症候・診断を学び、リハビリテーションに役立てることを目的とする。			
学習到達目標	・ 基礎的な神経疾患の病因・病態生理・症候・診断を理解する。 ・ 有痛性疾患の種類および病因・病態生理・症候・診断を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	脳血管疾患の病因・病態生理・症候・診断を学ぶ。		
	3-4	神経変性疾患の病因・病態生理・症候・診断を学ぶ。		
	5-6	感染および炎症性疾患の病因・病態生理・症候・診断を学ぶ。		
	7-8	急性疼痛の疫学・予後について学ぶ。 慢性疼痛の疫学・予後について学ぶ。		
	9-10	慢性疼痛の分類について学ぶ。 薬理の基礎を学ぶ。		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい			
教科書等	標準理学療法学・作業療法学 神経内科学 第5版			
参考図書等	資料を配布する			
関連科目	内科学Ⅰ 内科学Ⅱ 神経内科学Ⅱ 疾患別理学療法Ⅱ(神経筋疾患)			
コアカリキュラム対応	D-8-1～2 D-9			
最近の国試出題傾向	特定疾患のリハビリテーションに関する問題が頻出傾向にある			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	臨床スポーツ医学			単位数	2	時間数	40
科目区分	基礎専門分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	栗山 節郎、米川 正悟、川島 敏生 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						
授業の概要	スポーツ選手が受傷する場所はグラウンドであり、その場で対応することが症状の悪化ならびに二次障害を予防することとなる。そのため、スポーツ医学に関する基礎知識を習得し、臨床でのスポーツ選手の身体管理とパフォーマンスの向上を理解する。また臨床で遭遇しやすい疾患の病因や原因そして診断を学びながら障害予防と治療方法を習得することを目標とする。						
学習到達目標	・ 基礎的なスポーツ医学の疫学、予後について理解する。 ・ 基本的なスポーツ医学の病因、症状について理解する。 ・ 基本的なスポーツ医学の検査(画像を含む)、診断、治療(ドーピングを含む)を理解し実施できる。 ・ 基本的なスポーツ医学のリハビリテーションを実施できる。						
授業内容		内容	回	内容			
	1-2	【靱帯損傷】 ACL、PCL損傷など	13-14	川島担当分 スポーツ理学療法総論 傷害の発生要因			
	3-4	【テーピング】 足関節・膝関節など	15-16	川島担当分 部位別理学療法：肩、肘 投球障害肩・肘、テニス肘			
	5-6	【画像診断】 レントゲン・MRI・CT所見	17-18	川島担当分 部位別理学療法：大腿、膝 膝靱帯損傷、肉離れ、慢性障害			
	7-8	【正常と異常】・歩行など	19-20	川島担当分 部位別理学療法：下腿、足 外側靱帯損傷、アキレス腱断裂			
	9-10	【正常と異常】・肩の運動学など					
	11-12	【スポーツ外傷の各論】 ・野球肘、ストレステストなど					
授業方法	講義形式						
成績評価の方法	筆記試験(50%)ならびにレポート課題(50%)						
履修上の留意点	スポーツには、さまざまなスポーツ特有の動作があり、それが障害の発生機序に精通している。 さまざまなスポーツを見ることによって、スポーツにおける動作をイメージできるようにしておくこと。						
教科書等	資料配布						
参考図書等	資料配布						
関連科目	運動学、機能解剖学Ⅰ・Ⅱ、スポーツ外傷・障害学、整形外科						
コアカリキュラム対応	D-7、E-4-2						
最近の国試出題傾向	肩関節、膝関節のスポーツ外傷に関する問題は頻出。						

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	スポーツ外傷・障害学			単位数	1	時間数	24
科目区分	基礎専門分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	小関 博久 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	高齢者から小児までスポーツに関わる機会は、多くなってきている。そのためスポーツ外傷や障害を理解することは理学療法士と必須である。具体的にはスポーツ外傷・障害の発生機序や原因を詳細に理解し、外傷と障害の違いや、外傷の分類および処置方法について理解を深め、適切な理学療法が実施できるために必要な知識の取得を目標とする。			
学習到達目標	・スポーツ外傷と障害の疫学、病因、症候、予後について理解する。 ・スポーツ外傷と障害の検査（画像、生理検査を含む）、診断について理解する。 ・スポーツ外傷と障害の治療（臨床薬理を含む）を理解する。 ・スポーツ外傷と障害のリハビリテーションと障害予防を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【外傷と障害・スポーツ障害総論】 外傷の定義と処置方法 画像診断と臨床薬理	11-12	【スポーツ障害】 障害予防とリハビリテーション （テーピング・薬理・装具を含む）
	3-4	【スポーツ障害各論】 膝関節のスポーツ障害 （膝関節靱帯損傷・半月板損傷等）		
	5-6	【スポーツ障害各論】 下腿・足関節・足部のスポーツ障害 （シンスプリント・足関節靱帯損傷等）		
	7-8	【スポーツ障害各論】 肩関節のスポーツ障害 （インピンジメント症候群・野球肩等）		
	9-10	【スポーツ障害各論】 肘関節のスポーツ障害 （野球肘・上腕骨外側上顆炎等）		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	スポーツ外傷・障害学は1年次に履修する機能解剖学を基礎に展開される学問であることから、1年次に学ぶ機能解剖学に対しての知識を深めたうえで講義に臨むこと。			
教科書等	配布資料			
参考図書等	特になし			
関連科目	運動学Ⅰ、機能解剖学Ⅰ・Ⅱ、整形外科Ⅰ、臨床スポーツ医学			
コアカリキュラム対応	D-7			
最近の国試出題傾向	膝関節・足関節靱帯損傷、野球肩、外傷処置等すべての範囲にわたって頻出する。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	医療福祉論			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	柏倉 剛彦 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	現代では福祉の範疇が拡大し、地域での支援を基調としながら、医療、所得保障、介護、教育、就労など多岐にわたる。本講義では特に医療と福祉の関連性について中心的に展開し、将来臨床家となった際に福祉的観点からも患者を支援できる知識を得ることを目的とする。			
学習到達目標	・ 社会保障制度の歴史と種類を理解する ・ 医療保険、介護保険について理解する ・ 保健、医療、福祉施策について理解する			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	社会保障制度の歴史について 社会保障制度の種類について		
	3-4	医療保険制度について 介護保険制度について		
	5-6	年金保険制度について 労災保険制度について		
	7-8	理学療法士に必要な福祉的観点について		
	9-10	地域包括ケアシステムについて 多職種連携の理解		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	介護保険について事前学習をしておくとい			
教科書等	なし			
参考図書等	適宜資料を配布する			
関連科目	地域理学療法学Ⅰ・Ⅱ			
コアカリキュラム対応	B-3-1～3			
最近の国試出題傾向	介護保険下の理学療法などが出題される			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	生活環境学			単位数	1	時間数	24
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	原 隆之 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	この授業を受講する学生は、社会保障制度や法的諸制度について説明することができるようになる。 また、バリアフリーの概念と生活を支える福祉機器などについても理解し、住宅改造の要点について考えられるようになる。 さらに、住環境(生活環境)の課題を把握し、退院前評価ができるようになる。			
学習到達目標	・生活環境、社会保障制度、バリアフリーの概念について説明できる ・福祉用具(日常生活用具)の種類、適用について説明できる ・住環境(生活環境)の課題を把握する評価が実施できる			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【生活環境学の概念・法的諸制度】 ・生活環境と障害、バリアフリーの概念 ・法的諸制度など	11-12	【高齢者の在宅生活サービス】 ・高齢者の在宅支援サービスなど
	3-4	【生活環境の評価と改善計画】 ・生活環境改善計画 退院前評価の実際など		
	5-6	【生活環境としての住宅・住宅改修】 ・障害者をとりまく生活環境の整備など ・地域環境と公共交通など		
	7-8	【生活を支える福祉・リハ関連機器】 ・福祉用具(日常生活用具)など		
	9-10	【生活を支える福祉・リハ関連機器】 ・福祉用具(日常生活用具)など		
授業方法	主に講義形式だが、実技を行う日もある。			
成績評価の方法	筆記試験50%、レポート50%			
履修上の留意点	参考図書に目を通しておくことが望ましい。			
教科書等	奈良勲 『標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学 第4版』 医学書院			
参考図書等	基礎運動学 理学療法ハンドブック 生活環境論(理学療法テキスト) 生活環境学テキスト			
関連科目	リハビリテーション概論(1年)、理学療法概論(1年)、日常生活活動学(2年) その他、多くの科目と関連します。			
コアカリキュラム対応	E-4-1、E-5-3、			
最近の国試出題傾向	環境設定や家屋改修に関する問題は頻出。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	医療統計学			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	高柳清美 山際清貴						

授業の概要	本授業では、統計とは何か、なぜ統計が必要か、将来臨床家となった際に科学的な研究を進め、合理的な判断や結論を導くことができるようになるための基礎的な統計学を学習する。同時に、研究を進めるうえでの常識・ルールやエチケットについても学ぶ。			
学習到達目標	・ 基礎的な記述統計を理解する。 ・ 研究の流れを計画することができるようになる。 ・ パラメトリック検定、ノンパラメトリック検定を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	研究とは 記述統計と推測統計		
	3-4	疫学的重要性 研究のデザインと妥当性 実験計画		
	5-6	統計用語について 確率分布と標本抽出		
	7-8	相関係数 対応のある(ない)t検定 カイ二乗検定		
	9-10	分散分析 多変量解析		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい			
教科書等	資料を配布する			
参考図書等				
関連科目	研究方法論			
コアカリキュラム対応	B-6-1～2			
最近の国試出題傾向	オッズ比などの出題も散見される。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	運動療法基礎学Ⅱ			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	原 隆之 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	1. 運動療法は、理学療法の最も大きな柱として位置付けられている。解剖学や生理学、運動学、あるいは病理学などを背景に、理学療法士が得意としなければならない分野である。 2. 本科目の目的は、2～3年次に学ぶ各論に向けて、運動療法の基礎的な知識を習得することである。			
学習到達目標	1. 各機能障害の概要を説明できる。 2. 各運動療法の理論的背景を説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【呼吸の基礎】 ・運動による呼吸応答 ・呼吸障害の分類・評価		
	3-4	【呼吸障害に対する運動療法】 ・運動療法の理論的背景		
	5-6	【循環の基礎】 ・運動による循環応答 ・循環障害の分類		
	7-8	【循環障害に対する運動療法】 ・運動療法の理論的背景		
	9-10	【代謝障害に対する運動療法】 ・代謝と運動の関連、代謝疾患について ・運動療法の理論的背景		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（100％）で評価する。			
履修上の留意点	解剖学・生理学と平行して学習すること。			
教科書等	資料配付			
参考図書等	基礎運動学 理学療法ハンドブック 奈良勲 『標準理学療法学 専門分野 運動療法学 総論 各論 第3版』 医学書院			
関連科目	解剖学(1年)、生理学Ⅰ・Ⅱ(1年)、運動学(1・2年)、病理学(1年)などその他、多くの科目と関連します。			
コアカリキュラム対応	C-2-1,C-2-3,C-2-4			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	リスク管理学			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	川島 敏生 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	医療現場では、多くの職種が関わり合うため、ヒューマン・エラー(人為的な誤り)が生じるリスクが高い。この科目を受講する学生は、医療現場で起こりえる機器によるリスク、医療を提供する際のリスク、患者が生活する上でのリスクなどについて理解し、予測できるようになる。さらに、実際に起こった医療訴訟の例を基にその重要性を理解する。			
学習到達目標	・ 医療事故(インシデント含む)やリスクについて列挙できる ・ 理学療法関連機器の安全な使用方法を説明できる ・ 医療訴訟について理解する			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	実際に起きた医療事故からの学習 リス管理の必要性と言葉の理解 医療機関におけるリスク		
	3-4	リスク管理の定義と考え方 インシデントとアクシデント 医療機関におけるリスク管理の実際		
	5-6	リハビリテーションにおけるリスク管理 バイタルサイン リハビリテーションの中止基準		
	7-8	検査所見の理解 疾患別急変予測①、疾患別急変予測② 遭遇しやすい症状と訓練の判断		
	9-10	転倒・感染のリスク管理 物理療法のリスク管理 補填		
	授業方法	講義形式。		
成績評価の方法	筆記試験100%			
履修上の留意点	理学療法の全体像について理解しておくことが望ましい。			
教科書等	資料配布			
参考図書等	リハビリテーションリスク管理学ケーススタディ 宮越浩一 著 リハビリテーション リスク管理ハンドブック第4版			
関連科目	内科学(2・3年) その他、多くの科目と関連します。			
コアカリキュラム対応	E-5-1			
最近の国試出題傾向	第52回国家試験に10問程の出題(起き上がり時・歩行時・運動療法中・血液データの読み方など)			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	基礎理学療法学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	植竹 駿一 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	1年生で学んだ解剖学、生理学、機能解剖学などをベースに、共通する機能障害の病態やそのメカニズムを理解する。そして、疾患別理学療法のプログラムを立案するのに役立てる。			
学習到達目標	①各機能障害の病態と症状について説明できる。 ②各機能障害のメカニズムについて説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	運動麻痺の病態とメカニズム 筋緊張異常の病態とメカニズム		
	3-4	感覚異常の病態とメカニズム 疼痛の病態とそのメカニズム		
	5-6	筋力低下の病態とメカニズム 関節可動域制限の病態とメカニズム		
	7-8	創傷、靱帯損傷の病態とメカニズム 骨損傷の病態とメカニズム		
	9-10	認知機能低下の病態とメカニズム 平衡機能低下の病態とメカニズム		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	解剖学、機能解剖学、生理学、運動学などの知識を必要とする。			
教科書等	適宜、資料を配布する。			
参考図書等	機能障害科学入門 監修：千住秀明 神陵文庫			
関連科目	疾患別理学療法Ⅰ～Ⅺ			
コアカリキュラム対応	E-1-2			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	検査測定学Ⅱ			単位数	1	時間数	44
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	実習
担当講師	澤田 譲治 佐野 純平 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	評価とは、患者の持つ症状や障害を把握して患者の将来を予測する過程である。本講義を受講する学生は、各評価に必要な手技を習得することのみならず、評価結果に対する原因の考察、今後の方針まで考える力を習得できるようになることを目的とする。			
学習到達目標	・機能形態計測（四肢長、周径など）が実施できる。 ・筋緊張異常の程度と関連要因を把握する評価が実施できる。 ・感覚異常の程度と関連要因を把握する評価が実施できる。 ・疼痛（急性痛、慢性疼痛）の程度と関連要因を把握する評価が実施できる。 ・脳神経の異常に関連する評価が実施できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【総論】 評価の重要性、注意点など	13-14	【感覚検査】 表在感覚の検査
	3-4	【機能形態測定】 四肢長など	15-16	【疼痛検査】 疼痛の種類など
	5-6	【機能形態測定】 周径など	17-18	【疼痛検査】 Visual Analogue Scaleなど
	7-8	【筋緊張検査】 痙性・固縮の評価など	19-20	【脳神経検査】 嗅神経、視神経、動眼神経など
	9-10	【筋緊張検査】 被動性検査、懸振性検査など	21-22	【脳神経検査】 三叉神経、顔面神経など
	11-12	【感覚検査】 深部感覚の検査		
授業方法	講義形式と実習形式を併せて実施する。			
成績評価の方法	筆記試験(50%)ならびに実技試験(50%)にて評価する。			
履修上の留意点	動きやすい服装での参加が望ましい。			
教科書等	松澤正 『理学療法評価学 改訂第6版』金原出版 田崎義昭 『ベッドサイドの神経の診かた第18版』南山堂 『病気がみえるvol. 7 脳・神経 第2版』MEDIC MEDIA			
参考図書等	基礎運動学補訂第6版 理学療法ハンドブック第1～4巻			
関連科目	解剖学Ⅰ・Ⅲ(1年)、検査測定学Ⅰ(1年)・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ(2年)			
コアカリキュラム対応	E-4-1			
最近の国試出題傾向	専門科目（実施問題のこと有）にて出題される。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	検査測定学Ⅲ			単位数	1	時間数	44
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	実習
担当講師	川島 敏生 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	学生が、将来関わるであろう患者様に対し機能低下を把握するための評価方法の一つである。 その検査の目的として、疾病に関係なく理学療法士が実施する徒手筋力検査法（MMT）を正確に測定し、その検査結果から、患部の特定や鑑別診断を身につける。また、治療計画の立案に深く関わることを理解することも目標とする。			
学習到達目標	・ MMTの概念や目的を理解し、関節と筋の解剖生理学を考慮しながら正確に測定することができる。 ・ 筋力低下の程度と関連要因を把握する評価が実施できる。 ・ 測定結果から、患部の特定や鑑別診断としての仮説が立てられる。 ・ 測定結果から、治療計画の立案が立てられる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【総論・上肢の筋力テスト】 筋力とは、MMTの歴史など、肘関節の筋	13-14	【頸部の筋力テスト】 頭部、頸部、複合部などの筋
	3-4	【上肢の筋力テスト】 肩関節の筋	15-16	【体幹と骨盤の筋力テスト】 体幹部、骨盤部の筋
	5-6	【上肢の筋力テスト】 肩甲帯の筋	17-18	【脳神経支配の筋力テスト】 眼球、顔面、舌など
	7-8	【上肢の筋力テスト・下肢の筋力テスト】 前腕の筋、手関節の筋、股関節の筋	19-20	【MMTの別法・機能テスト】 機器を使用する方法など
	9-10	【下肢の筋力テスト】 股関節の筋、膝関節の筋	21-22	【筋力低下を呈する疾患とMMT】 末梢神経麻痺など
	11-12	【下肢の筋力テスト】 足関節の筋、足趾の筋	22-24	【総括】 難しかった部位の復習、まとめ
授業方法	講義形式と実習形式を併せて実施する。教科書（徒手筋力検査法）項目順でなく、理解しやすい部位から開始する。			
成績評価の方法	筆記試験(50%)ならびに実技試験(50%)にて評価する。			
履修上の留意点	患者様の症状は様々であるので、授業では特定の学生と組むのではなく、多くの学生と実技練習を実施することが望ましい。			
教科書等	「新・徒手筋力検査法 第9版」 共同医書			
参考図書等	「基礎運動学 第6版」医歯薬出版 「体表解剖と代償運動」医歯薬出版			
関連科目	解剖学Ⅰ(筋・骨格系)、機能解剖学Ⅰ・Ⅱ、運動学Ⅰ、検査測定学Ⅰ			
コアカリキュラム対応	E-4-1			
最近の国試出題傾向	毎年、3問出題されている。（2問は3点問題として出題される）			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	検査測定学Ⅳ			単位数	1	時間数	44
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	実習
担当講師	澤田 譲治 斎藤 育洋 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	評価とは、患者の持つ症状や障害を把握して患者の将来を予測する過程である。本講義を受講する学生は、他の検査測定学の範疇に含まれない様々な検査項目に関する技術の習得することのみならず、各障害の原因や、その改善方法まで考える力を習得できるようになることを目的とする。				
学習到達目標	・反射検査、協調性検査に関する手技や手順を理解し、実施できる。 ・バランス、平衡機能低下の程度と関連要因を把握する評価が実施できる。 ・歩行の評価に関する手技や手順を理解し、実施できる。 ・持久性低下の程度と関連要因を把握する評価が実施できる。				
授業内容	回	内 容	回	内 容	
	1-2	【総論】 評価とは、評価の必要性など	13-14	【バランスの評価】 バランス能力低下の原因など	
	3-4	【反射検査】 反射のメカニズムなど	15-16	【バランスの評価】 静的バランス評価など	
	5-6	【反射検査】 深部腱反射の評価など	17-18	【バランスの評価】 動的バランス評価など	
	7-8	【反射検査】 病的反射の評価など	19-20	【歩行の評価】 歩行スピード、歩行距離の評価など	
	9-10	【協調性検査】 協調性運動障害、運動失調検査など	21-22	【歩行の評価】 持久性の評価など	
	11-12	【協調性検査】 共同運動障害、測定障害など			
授業方法	講義形式と実習形式を併せて実施する。				
成績評価の方法	筆記試験(50%)ならびに実技試験(50%)にて評価する。				
履修上の留意点	動きやすい服装での参加が望ましい。				
教科書等	松澤正 『理学療法評価学 改訂第6版』金原出版				
参考図書等	基礎運動学補訂第6版 理学療法ハンドブック第1～4巻 臨床評価指標入門 など				
関連科目	解剖学Ⅰ・Ⅲ(1年)、運動学(1年)、検査測定学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(1・2年) その他、多くの科目と関連する。				
コアカリキュラム対応	E-4-1				
最近の国試出題傾向	専門科目において反射検査、協調性検査、歩行の評価などが出題される。				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	検査測定学Ⅴ			単位数	1	時間数	40
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	実習
担当講師	山際 清貴 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	この科目を受講する学生は、中枢神経疾患患者の特徴を理解し、適切な検査項目を選択できるようになる。また、中枢神経疾患患者に対する医療面接のポイントを押さえ実施できるようになる。さらに、一般検査のみならず、姿勢異常や運動能力低下、動作能力の低下などの関連要因を把握する評価が実施できるようになる。				
学習到達目標	・ 中枢神経疾患患者に対する医療面接ができる ・ 中枢神経系の検査を実施することができる ・ 検査結果より統合と解釈ができる				
授業内容	回	内 容	回	内 容	
	1-2	中枢神経とは 中枢神経疾患の病態	11-12	中枢神経疾患に対する筋緊張検査、感覚検査を行えるようにする	
	3-4	中枢神経疾患に対する検査の重要性 評価バッテリーの紹介	13-14	中枢神経疾患に対する運動麻痺、バランス検査を行えるようにする	
	5-6	中枢神経疾患患者の特徴について理解する	15-16	中枢神経疾患に対する高次脳機能検査を行えるようにする	
	7-8	中枢神経疾患患者に対する医療面接を行えるようにする	17-18	中枢神経疾患に対する運動能力検査、動作能力検査を行えるようにする	
	9-10	急性期(ICU)における検査を理解する 中枢神経疾患に対するバイタルチェックやリスク管理を行えるようにする	19-20	検査結果より統合と解釈を行えるようにする	
授業方法	講義と実習を併せて実施する。				
成績評価の方法	実技試験80%、レポート20%				
履修上の留意点	中枢神経疾患について復習しておくことが望ましい。				
教科書等	松澤正 『理学療法評価学 改訂第5版』 金原出版				
参考図書等	基礎運動学 理学療法ハンドブック				
関連科目	解剖学、理学療法評価学 その他、多くの科目と関連します。				
コアカリキュラム対応	E-4-1				
最近の国試出題傾向	第52回国家試験に15問程度出題(中枢神経の解剖・急性期の治療・リスク管理など)				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	運動療法学Ⅰ			単位数	2	時間数	80
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	実習
担当講師	齋藤 育洋 佐野 純平			○理学療法士の実務経験に基づく講義			

授業の概要	運動療法は、理学療法の最も大きな柱として位置付けられている。解剖学や生理学、運動学、あるいは病理学などを背景に、理学療法士が得意としなければならない分野である。本講義では、安全かつ効果的な各種運動療法について説明し、対象者に実践できるようになることを目的とする。			
学習到達目標	・各種運動療法の方法論を説明できる ・各種運動療法を実施できる ・運動療法時のリスク管理の重要性を列挙できる			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	運動療法の種類 基本的運動の種類	19-22	姿勢保持運動 バランス練習
	3-6	関節可動域運動① ストレッチング	23-27	基本動作練習 (寝返り、起き上がり、立ち上がり)
	7-10	関節可動域運動② 関節モビライゼーション	28-32	歩行練習 (歩行補助具を用いた歩行)
	11-14	筋力増強運動	33-36	リラクセーション
	15-18	筋持久力増強運動	37-40	協調性運動
授業方法	講義形式と実習形式を併せて実施する。			
成績評価の方法	筆記試験(50%)ならびに実技試験(50%)にて評価する。			
履修上の留意点	事前に各種病態の理解を深めておくことよい。 運動療法基礎学Ⅰで学んだ知識を復習しておくことが望ましい。			
教科書等	資料配布			
参考図書等	「運動療法学 第2版」文光堂、「運動療法学 第2版」金原出版			
関連科目	運動療法基礎学Ⅰ			
コアカリキュラム対応	E-6-1～3 E-6-5～6			
最近の国試出題傾向	運動療法は専門問題、基礎問題ともに頻出			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	物理療法学Ⅰ			単位数	2	時間数	40
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	原田憲二 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	理学療法の臨床現場で、物理療法機器が設置されていないところは皆無に近いと思われる。このように、物理療法は理学療法の一手段として重要な領域であるにもかかわらず、むしろ補助的な役割にとどまってきたのが現状である。本授業は、適切かつ効果的に物理療法機器を使用できるようになるための知識を習得することを目的とする。				
学習到達目標	・牽引療法、水治療法、温熱療法、寒冷療法、電気療法、光線療法の原理・生理学的作用を理解する。				
授業内容	回	内 容	回	内 容	
	1-2	物理療法の基礎 ・熱物理学 ・温熱の生理学	11-12	電気療法 ・電気療法の分類および基礎	
	3-4	温熱療法 ・ホットパックおよびパラフィンの適応・禁忌・効果	13-14	電気療法 ・電気療法の適応・禁忌・効果	
	5-6	極超短波・超短波療法 ・極超短波および超短波の適応・禁忌・効果	15-16	光線療法 ・紫外線療法の適応・禁忌・効果 ・赤外線療法の適応・禁忌・効果	
	7-8	超音波療法 ・超音波の適応・禁忌・効果	17-18	水治療法 ・水治療法の分類 ・水治療法の適応・禁忌・効果	
	9-10	寒冷療法 ・寒冷療法の適応・禁忌・効果	19-20	牽引療法 ・牽引療法の適応・禁忌・効果 バイオフィードバック療法	
授業方法	講義形式				
成績評価の方法	筆記試験(100%)				
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい				
教科書等	標準理学療法学・作業療法学 物理療法学 第4版				
参考図書等	資料を配布する				
関連科目	生理学Ⅰ・Ⅱ				
コアカリキュラム対応	E-5-2				
最近の国試出題傾向	物理療法に関する問題は必ず出題される。				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	装具学			単位数	2	時間数	40
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	植竹 駿一 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	装具を用いることにより失われた機能・生活能力を獲得できることは、本来のリハビリテーション医療の基本概念である。近年の装具分野は人間工学・ロボット工学や材料工学の発展に伴い著しく進歩している。対象者のニーズは多様化しており、それに対応した知識・技術の応用が求められている。安全かつ効果的な理学療法が提供できるように、知識を修得すると共に、脳卒中後遺症や脊髄損傷後における装具の実際を実習・演習を通して理解することを目的とする。			
学習到達目標	・ 装具の機能を理解・説明する。 ・ 装具の種類・各部の名称及び役割を実物を通して理解・説明する。 ・ 装具のチェックアウトを理解し説明する。 ・ 各疾患に使用される装具の特徴を理解し、処方に関しての流れを説明する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	装具の歴史、目的、役割、分類などについて理解	13-14	脳卒中後遺症における装具の処方とチェックアウトの理解
	3-4	装具処方のための生体力学の理解 靴型装具についての理解	15-16	脊髄損傷における装具の処方とチェックアウトの理解
	5-6	下肢装具の種類と役割、チェックアウトの理解	17-18	小児関連疾患における装具の処方とチェックアウトの理解
	7-8	上肢装具の種類と使用目的などの理解	19-20	整形外科疾患、スポーツ関連疾患における装具の処方とチェックアウトの理解
	9-10	上肢装具チェックアウトの理解		
	11-12	体幹装具の種類と役割、チェックアウトの理解		
授業方法	講義と実習を併せて実施。			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	予習をしたうえでの参加が望ましい。			
教科書等	細田多穂 『義肢装具学テキスト 改訂第3版』 南江堂			
参考図書等	基礎運動学補訂第6版 理学療法ハンドブック第1巻 義肢装具のチェックポイント			
関連科目	解剖学(1年)、検査測定学(1・2年)、日常生活活動学Ⅰ・Ⅱ(2年)、運動学（1・2年） その他、多くの科目と関連			
コアカリキュラム対応	E-5-3			
最近の国試出題傾向	毎年2問は出題。疾患に絡めた問題としての出題が増加している。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	日常生活活動Ⅰ			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	山際清貴 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	人と向かい合うことを基本としている理学療法において、日常生活活動(ADL)は運動療法とともに大きな領域を占めている。本科目の目的は、理学療法におけるADLの位置づけ、ADLの運動学的分析、疾患別のADLなどの基礎知識を、講義形式にて習得することである。			
学習到達目標	・ ADL概念の発展を理解する。 ・ ADL評価の位置づけおよび役割について理解する。 ・ 疾患別のADLを理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	ADLとは ADLの概念の発達 ADLを支える専門職とは		
	3-4	ADLとQOL 代表的な主観的QOL評価 代表的な客観的QOL評価		
	5-6	ADLの評価方法 FIM・Barthel Indexを中心に		
	7-8	脳血管疾患患者のADL 脊髄損傷者のADL 人工関節全置換術後のADL		
	9-10	神経難病患者のADL 切断者のADL 視覚障害者のADL		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい			
教科書等	標準理学療法学・作業療法学 日常生活活動学・生活環境学 第5版			
参考図書等	資料を配布する			
関連科目	日常生活活動Ⅱ			
コアカリキュラム対応	B-2-1			
最近の国試出題傾向	FIM・Barthel Indexに関する問題は例年出題される。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	日常生活活動Ⅱ			単位数	1	時間数	44
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	実習
担当講師	澤田譲治 斎藤 育洋 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	本授業では日常生活活動Ⅰで習得した知識を元に、更に深化した学習を進めることを目標とする。 また、自助具・歩行補助具・車椅子などを実際に利用し患者心理を学ぶことで、臨床現場で適切な処方が行えるようにする。			
学習到達目標	・ADLとQOLの関連性を理解する。 ・健康と生活の関連性を理解する。 ・自助具・歩行補助具・車椅子などを実際に利用し、患者心理を学ぶ。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	起居動作の体験と介助法 (寝返り・起き上がり等)	13-14	車椅子の特徴① 採寸、調整について
	3-4	起居動作の体験と介助法 (立ち上がり・移乗動作等)	15-16	車椅子の特徴② 駆動方法、環境設定について
	5-6	日常生活動作の体験と介助法	17-18	入院患者のADL
	7-8	各種杖、歩行補助具の調整方法	19-20	退院後のADL
	9-10	歩行補助具を使用した歩行・階段昇降の 体験	21-22	FIMとバーセルインデックス
	11-12	疾患別の日常生活活動について (関節リウマチ・人工股関節全置換術後等)		
授業方法	実習形式			
成績評価の方法	筆記試験(50%)、実技試験(50%)			
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい			
教科書等	標準理学療法学・作業療法学 日常生活活動学・生活環境学 第5版			
参考図書等	資料を配布する			
関連科目	日常生活活動Ⅰ			
コアカリキュラム対応	E-5-6			
最近の国試出題傾向	近年、在宅生活に関する問題が散見される。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	隣接領域論			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	松本 容子 中島 明子 小野 賢一			○臨床現場の実務経験を活かした講義			

授業の概要	リハビリテーションは理学療法士のみで成り立つものではなく、隣接領域の他職種との連携が必要不可欠である。本科目では、対象者に対してより適切なリハビリテーションを提供できる能力を養うために、隣接領域の他職種の役割、業務内容を理解することを目的とする。また、地域における多職種連携と理学療法士の役割について理解することを目的とする。			
学習到達目標	・ チーム医療と多職種連携について説明することができる。 ・ 看護師、作業療法士、言語聴覚士の役割と業務について説明することができる。 ・ 地域における理学療法士の役割について説明することができる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	リハビリテーションチームとは① (看護師の役割と業務)		
	3-4	リハビリテーションチームとは② (作業療法士の役割と業務)		
	5-6	リハビリテーションチームとは③ (言語聴覚士の役割と業務)		
	7-8	チーム医療と多職種連携 地域における多職種連携		
	9-10	地域包括ケアシステム、通所施設、入所施設 訪問における理学療法士の役割		
授業方法	講義および実技形式			
成績評価の方法	筆記試験(50%)ならびに課題レポート(50%)			
履修上の留意点	事前に参考書に目を通して授業に参加することが望ましい。			
教科書等	特になし			
参考図書等	「入門リハビリテーション概論 第7版」医歯薬出版 「標準理学療法学 地域理学療法学 第4版」医学書院			
関連科目	理学療法概論(1年)、リハビリテーション概論(1年)、地域理学療法学Ⅰ(2年)			
コアカリキュラム対応	D-3-4,E-7-1			
最近の国試出題傾向	チーム医療に関する問題が出題			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	地域理学療法学Ⅰ			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	原田 憲二 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	近年わが国では維持期リハビリテーションを介護保険へ移行する改定が繰り返されており、医療と介護は密接な関係となっている。またリハビリテーションは外来の機能強化だけでなく、介護保険の通所の併設を促すような方向付けがなされ、医療機関であっても地域を意識した活動が求められている。本科目では地域連携のあり方、理学療法士の業務のあり方を理解することを目的とする。			
学習到達目標	1. 地域理学療法における理学療法士の役割を説明できる。 2. 入所・通所施設での理学療法について説明できる。 訪問における理学療法について説明できる。 健康維持、介護予防、終末期医療における理学療法について説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【地域リハビリテーションの考え方】 ・地域リハビリテーションの定義 ・理学療法士が担う役割の範囲		
	3-4	【地域包括ケアシステムのなかでの理学療法士の役割】 ・地域包括ケアシステムと地域リハビリテーション		
	5-6	【介護保険サービス下での理学療法】 ・介護保険の仕組み ・介護保険サービス下での理学療法		
	7-8	【介護予防と健康増進】 ・介護予防 ・健康増進		
	9-10	【住環境整備、実際の事例】 ・住宅改修・福祉用具 ・脳卒中		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	教科書、参考図書に目を通しておくことが望ましい。			
教科書等	細田多穂 『シンプル理学療法学 地域リハビリテーション学テキスト 改訂第3版』 南江堂			
参考図書等	基礎運動学 理学療法ハンドブック			
関連科目	理学療法概論(1年)、リハビリテーション概論(1年)、地域理学療法学Ⅱ（3年） 総合臨床実習Ⅰ・Ⅱ(4年生)			
コアカリキュラム対応	E-7-1,E-7-4,E-7-5,E-7-6			
最近の国試出題傾向	地域リハビリテーション関連の問題は近年頻出傾向にある。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	地域リハビリテーション実習			単位数	2	時間数	90
科目区分	専門分野	対象年次	2	学期	後期	授業形態	実習
担当講師	理学療法学科専任教員／実習施設指導者 ○理学療法士の実務経験に基づく指導						

授業の概要	本実習では、病院および介護老人保健施設に実際に赴き、通所事業・訪問事業などの全体像、理学療法士の役割などについて学習する。						
学習到達目標	・通所事業、訪問事業の役割について理解する。 ・理学療法士と対象者の関係性の構築方法を理解する。 ・他部門との関わり方を見学し、チーム医療の重要性を理解する。 ・理学療法の進め方を理解する。						
授業内容	内容						
	朝のカンファレンスの見学 対象者の迎え方(1日の時間の過ごし方) 情報収集の方法(作業療法士・言語聴覚士・看護師・介護職員など) 理学療法(評価・物理療法を含む)の見学 他部門との協働方法を観察学習 問題が生じた場合の対応方法を学ぶ その他						
授業方法	実習形式						
成績評価の方法	臨床実習報告書の内容から評価を点数化し成績とする。						
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい						
教科書等	特になし						
参考図書等	特になし						
関連科目	コミュニケーション論、評価実習、総合臨床実習Ⅰ・Ⅱ						
コアカリキュラム対応	F-1～4						
最近の国試出題傾向	対象者との信頼関係の結び方などは毎年出題される。						